

郎路生麻・幹主

川柳新誌



四月
號
第八卷
第四號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和六年四月一日發行（每月一圓一日發行）

四月例会

▼日時 四月二日午後六時半
▼場所 南區清水町電停西入北側 端の坊
▼兼題 「健」 三句
▼會費 二十錢
▼初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

文苑

川柳雜誌第八卷第四號目次

創作

近川柳 塔.....麻生路郎(二)(三)

山雨樓 一徹 柳路雅幽
愚陀 琴人 新水町二

二南 双車 一流 鶴峯

多郎 夢裡 錦水 靈壺

觀月 翠夢 春秋 豆角

櫻果 華水 裸人 圓太

明珠 兄卓 計加 蒼路

閑生 濁水 綠之助 光路

粒々集 前田五健 長崎柳秀

富士野鞍馬 大島濤明

池澤樂居 麻生霞乃選(三)

光耀抄 麻生路郎選(三)

近作柳樹 安井ひろし選(三)

柳の絮 長野吉高(四)
或る角度から見た 出口雨町(三)
作家亂蹴 松丘町二(二)
安西杏三 竹内多聞(八)
川柳に感心し度い 路郎、紋太、ひろし(三)
評作家展望 琴人、山雨樓、町二(三)
難解史句 岡田三面子(三五)
地 歸へらぬ小鳥 尾崎海洋人(一)
おぼろ 夜 山本巧笑(二)
一強迫觀念者の放談 中村有三(二)
鐵 應接室の寄生虫 高峰柳兒(三)
火 通勤工場にての或る日 大山露斗(五)
サラリーマンロード(完) 楊井二南(六)(元)

一路集(募集句).....(四)

髮指 前田雀郎選(四)
現金 太田朝陽選(四)
本社三月例会 出口雨町共選(四)
支部の聲 安西杏三選(四)
續川柳戸籍調 松丘町二記(四)
杭全町MEMO 日野華水(七)
橋本綠雨(三)

表各地柳壇紙 田村孝之介(四)



近作

麻生路郎

櫻は櫻僕は君君

六〇號病室の人となりて(四句)

病臥してゐるに電話の印鑑の
戀の外科病事務長も早春か
眼閉づれば頸に胸に看護婦の手の
詰所の笑ひ春の憂鬱



川柳塔

福田山雨樓

○ 上 町 線 に 淡 き 弦 月
 さみしき云ひて帽子きる子よ
 柳の芽仲仕の指でちぎられる
 いかなごがうまい子の箸親の箸
 公判傍聴 ニリ
 度膽を抜いて判官入廷
 廷丁はまたつかくさ往て叱り
 勞 働
 馬の喰ふこども自慢にして稼ぎ
 髪
 久々を餘りに薄き母の髪

指

一世紀前の型なる父の指

現金

現金を押し頂いて儲けて居

○

長谷川一徹

一人行けば舐横ざり顔を見る
 臺の命取らねばならぬ部屋に入る
 帽冠る事を忘れて戻るなり
 専攻の氣病ひきき言葉なし
 酔ひしれて呼吸だけする小魚さる
 背景に肩いからして何處へ行く

○

岩崎柳路

新世帶徳用マツチも買ひませう
 袖口で眼糞を拭いて長煙管
 劍劇の捻じがゆるんだ蓄音機
 此の棚も賣ります云ふ店じまひ

○

關本雅幽

葉ほたんが開きすぎたで棄てられる
 起重機の動くあたりにある心
 燃ゆるにはひきい濕氣のある地べた

今こなつて家風に合わぬ桐だんす
十能へ男の片手叱られる
鐘紡の煙の下で咲くバラよ
桂馬の頭へ逃ける一手だ
妹は約束通り男産み

○ 出る少女の唄へる 出口 雨 町

時彦ミドライブをした春の夢

春 二 章

酒樽を叩けばこゝも春の音
修道院へ春風はなまめきて

或る男

散髪をせよこは友も云ふてくれ

釜が崎にて

前科者歸れば酒があるばかり
プロ漫畫ゴリラのやうな顔に出来

○ 松 盛 琴 人

人間は羅馬をきづくのにかゝり
大膽に云ふも女給のサービスか
日給へ離れて暗い日を拜み

骨盤が悲鳴やあけんバスガール
廢物のベン尖きに似て職がなし
朗らかな朝を唱つてはたき掛け
鶯を聞いてゐられず靴をはき
金づくでゆかぬ心勞やつこぬけ
友を今京の春日へハツキリ見

○ 朝 田 新 水

戀ならなくに女を酔はし
好色に有閑階級だこも知られ
誘惑を氣づき出戻り眼をつむり
ゲートルを履くばかりに旅すがた
焼香へ春の陽射しも寒からん
初節句弱い子供を育てゝ居
春めきをひよこの聲になつかしみ
雨を胃して屍体昇いて行く

○ 松 丘 町 二

煤煙を溶かした雨が靴に沁む
アスファルトに荷馬の爪は立たざりぎ
ビルディングから風に吹かるゝ人を瞰る

○ 伊藤 愚 陀

熟れぬ少女が春風におはれたり
牛の性慾が街並に春めく

○ 橋 本 緑 雨

横町へ來てもネオンの色を見せ
ビール樽ぎつしした音でころけ
櫻咲く話に夫婦睦まじく
米櫃が空になりお國へしばらく
ニュークリーム處女の口にもやはらかし
猫三匹にお妾はごりまかれ
銀の元結處女の春らしく
白粉をつけても噂して呉れず

菱井不路子さんへ

結婚が趣味の人ならこも思ひ

◇ 楊 井 二 南

泣いてゐたこみを女は知つて欲し
明日のない人に相手をして居れず
迷惑を云はず善人夫婦なり
云ひ負けてからの女が死にそうな
半數はさくらの様な味方も居

獨活發心

洗面器から買ひ初める一人立ち

◇ 河 野 双 車

追従に笑へば入齒抜けかける
ブライドもついに餓には勝たざりき
金貸してやるビラ今日も入れてある
餘寒まだ去り難く候水の洩

◇ 裕 一 流

療養の生きれば生きるほご不幸
子供等の軍歌に病める身を思ふ
さてさて聖者も度し難きかな
事ごに感謝する程無智でなし
陰鬱な家をはなれて家のこも

◇ 福 田 鶴 峰

氣にくわぬ話新聞に目を落し
壁一重變れば巡查呑み手なり
刑事室叱る横手で碁を圍み

◇ 松 田 多 郎

戀すれば髪の方の強さ知り
浮薄さは指まで切つてこも云はず
石鹼の泡を掴んだ戀だつた
振られてるこは知りても手相喜びて
オーロラもかくやま街の夜の雪

◇ 村松 夢 裡

御役人係りが違ひ横を向き
簡單にいつてしまへば別れる氣
たまさかにのめば電車で浮れてる

◇ 上 野 錦 水

幸福に育つて弱い身を惱み
靴みがき商賣だけの服を着る
お隣りを日かけにしてる洗濯屋
親切に途を教へて乗りすごし

◇ 片 桐 靈 壺

苺賣るバザーの夢を語る妻
玄關に子等の足形見る日和
五割引時代の帶も買はする
夫ある子ある仲居の弾けばきて
一盛の密柑を包む御老人
マドロスを御へ小切手書く身分

◇ 川 村 觀 月

ほうかむり馬鹿正直な姿なり
尋常を出るこ一直線に生き
五圓以下の預金するのがはかしく

よれくの服で諸君に呼びかけん
泣きついてすがりつくのも戦術よ

◇ 生 田 翠 夢

卑窟さは同じ椅子に生きてゐる
唄つてくれ俺は退窟してゐるのだ

ルンペンを歌へる

ルンペンにふき魂の孤影を見

◇ 喜 多 春 秋

本宅の二頭政治を伯母も云ひ
病人の耳があんまり聞えずぎ
嫁ぐ日も近くレターの整理すみ
自信ある美貌今夜も敵があり
青い部屋何んぞ妖しき美しさ
踊子の腰から折れた形なり

◇ 須 崎 豆 秋

ひさぶくに歸れば時計だけ動き
くすり湯にくすり袋が浮いて晝

◇ 藤 岡 櫻 果

土に惚れよこは偽善者ほざいたり
雲雀今墜落こ云ふ落ち姿

少年の頃の遠足をおもふ

一足は豫備の草履を腰に付け

次男急患

急患を抱いて女房のお題目

定休日

肩車せよと晝寝の耳を引く

◇

日野華水

衣桁からさるる袂に何かあり

畑から日の出を見てる田舎の子

妹のお友達とはもう云はず

縁談のすきに去年の蠅が飛び

◇

中野裸人

さらの下駄はいて背中をたゞきに來

俺よりも低い男も鏡に居

駄菓子屋を一番先に見にやられ

皆金がかゝつてゐるミ子に教へ

高下駄の女も固い約束し

遊び半分によれミ友をばけましぬ

友達を待たして眼鏡買ふてゐる

残されし枕へ轉ぶ夏蜜柑

櫻井圓角

堰止める勇氣もなく傍に居る

迷信の話し屑糸のほぐれやう

◇

西村明珠

宿題はもう母親に判らない

日めくりはネクタイ結ぶ手で破ぶり

貯金箱やつぱり親に入れさせる

集金に動く玩具が目にとまり

ワントン屋よべば笛ふく顔でなし

ネクタイは曲つてゐてもよく喋り

氣短かな父が宿題してしまひ

花畑一周すればお中食

病氣するまでは調法がれたに

◇

木村晃卓

僕の氣さかゝわりもなくさえずるよ

なきあゝは母さ思への銀指輪

見渡せば金でうごめく人の數

◇

三好計加

大根の抜けだしそうに立つてゐる

コマが廻ればワイ／＼騒ぐ

雪解けのヂャブ／＼音を聞く書齋
ホイミ云へばホイミ答へて妙を上げ
追風におされ村道かけてゆき
一本の八手で小庭よく見える
死んでから信心サツバリやめたらし
暫くは牛車の後をついて行き

◇ 平井 蒼太

夜をこめてけものゝ如く男ゐる
みち説ける後姿の淋しさは
風吹ける今宵わびしくまろび寝の

◇ 阿部 閑生

文鳥の籠影うけて洗ひ髪
さの道も中途で消える新開地
むだ事であつても貸してやんなさい
口癖の死にたいももう云はずなり
黄鳥をびつくりさして大工が来
俯向けに一つこけてる野球誰
大雪に按摩の戀を聞かされる

◇ 中澤 濁水

發車ベル高い土産へまごつかず

出勤の吸殻いつも此處で捨て
名乗られて幼い顔ミ引き合し

◇ 伊藤 緑之助

風よけの蔭に蜜柑の色のよし
女工達高田稔に惚れてゐる
お寺の屋根が昔の月を慕つて
女房を賣つたそうなきけすまれ

◇ 中見 光路

詮するにおためごかしも算盤よ
あけ足を美ン事掬ひ爛へ立ち
いふような鈍な子でない妻の留守
春さむがしむ脊廣にて脊廣にて
小揚子の女房呼んだり立たせたり
金箔の剥けきる彌陀のあな尊
硝子越しあやす男湯泣きやまず
それよりも酒ミ煙草を下けたれや
終ミ掛けがねへ戸を任せミき
雪てふに蝙蝠傘の不粹なる
會ふて見りやあふた氣になる人ミあひ



川柳に感心し度い

竹 内 多 聞

川柳は世の俳句や和歌なごに比較して割合に自由であり放奔である。そうしたたものご見做されて来たこの氣安さが、川柳の一つの生命であるかの如くにされてゐる。如斯肩の凝らぬ親しきは本當に結構なこゝと思ふ。

ところがその反面川柳を平民文學ごころか、誰れでも作りやすく組しやすしご見てしまふこゝである。作品に接してゝもその句が出来た苦心なごを世上凡ての物事に於て見るやうな感激の目で見直すべきをしない。怪我がの拍子にでも出来たかのやうに見へたり自分でも容易に出かすがやうに自惚れる、夫れ程に川柳さいふものが他のものに較べて陽氣の發せぬものごされてゐる。二度句を作るご「ハーン」感んなものか「ごいつた程度に早合點して直ぐ映い自己の範圍で天狗になつてしまふ、そして川柳のヤマが見へたごしてしまふから始末に了へない。斯ふ決めてしまつたら最後ごれだけにいづばたいでも作句をやらずそんなり止めてしまふ人が可成り多いやうに思ふ。

此の點から考へて見たい、如何に自由詩だごいつてごりごめのない自由は本當の自由でない、今日の川柳は存分勝手な言ひまはして文字をつらね吾が作品此れなりごしてすましてゐるの自由さで、他の文藝その他の見るが如き段階がハッキリしない爲めに獨りよがりになつたり苦心を拂はなくなる。たゞ何時の日に自分ご自分の作品に對して厭いて来るからして此れではいかぬごなし己れの作句態度の型を變造して發表して来るごいつた有様である。柳詠が比較的に感銘をもつてごもごかれぬ證左も此の勝手な自己開拓やら變節やら、譯も判らぬものに變つて来て然る銘々は夫れをしも進歩ご見做し振舞つてゐる、今日の狀態に胚胎せぬか。勿論各々の個性を太らしめ引き伸ばすごごは當然であるが夫れもいつのまにか自惚や自己憑醉にかゝつて是がフラクになり川柳界さいふ大きな地場からの見解を異にして来る。夫れ等に限つてやがて發表慾の恣烈ごなり他の作品に透徹せぬ眼ごなり了るものである。

自分の感情を自分が手盛りをするのに何んな方法でも構はぬ
さいへばそのやうなものゝ川柳には川柳で己すゝ則がある。そ
の川柳の器にのせて出さねば俳句になつたり狂句になつたり、
さては格言みたいになつて此れを饗はれる相手の食味を減する
こと甚だしい。川柳を放れて川柳は無い。
稍もすれば川柳の根本義はそんなら何やこいつてモ一度うし
ろを振向かねばならぬくらゐ今日の柳界はバラ／＼になつてゐ
ることを痛感する。勿論時代の思想はジツトしてゐるまいからそ
のさきさきの相を加味はするけれども廂を借して主家を倒して
しまつては川柳が泣く譯である。殊に初心者が今日川柳を作り
初めに戸惑ふのは何等の段階も見當らぬことである。「藝術は
型より」だがその型が今日では探しまはさねば見付からぬのだ
から厄介である。餘りにも統制の無き自由さに疲れてゐるものが
今日一般社會の狀態であるが如く柳界にも御多分に洩れぬ。
日々吐かれる玉石混淆此れを見てゐる應招の遣が勿體ない、
夫れをしもセブすれば作者の氣嫌に反くし發表しても感心し
てくれねば恐らく天下に無駄さいへは此れも最たるものであら
う。

句評やら鼎座吟、完膚なきまでに句を組上に究めることが此
の頃漸くして迎へらるゝやうになつたのも過去の放縱さに飽
いた結果に外ならぬ「一句を残せ」それは容易な仕事では無い、
ここに氣がつけば今少しく句を見詰めて度い自分の相もともに。
南風に紙屑籠を引くりかへしたやうにバラバラしてゐる今日

の柳界に力強く首筋をつかまへて『大阪見たか京見たか』をや
つてくれることを望む、川柳を眞面目なものとすしての宣傳は遠
の昔しの業、自己の佛心ミ川柳ミをピツタリミ合しで寸分の隙
なからしめるべき何等かの力があつて欲しい、そこまでのもので
なくんば川柳の生も餘技の範圍を脱しない、柳人の外に詩外
に句を擴充せんとするものは先ず自らにあつて頭上に三十棒を
甘受せよだ、自分の句が一句でも數多く活字になることをのみ
願ふさもしから放れたたい、眞の力作であることに自らの主張
に權威あらしめたたい。然してその眞價を何人も肯考し得らるゝ
やう研究發表したいものだ。くだらぬ句が何萬あつたところで
力ある一句を念願するものゝためには無駄である。

斯様に願つて來るさき始めて川柳の六ヶしさが判つて來る、
俳句の如きは和歌の如き所謂俳句的行儀も視るべきものが備
はつてゐる此れがコロモミなつて人々の言はんさするものを詩
化し美化して發表されて來た丈けに非常にラクである、その點
川柳さきては素ツ裸を呈露して何等のカモフラツヂを持たぬ、
いつか誰れやらが『素』ミいふことをかいてゐたが有りや本當
に好い、結局何んでもだが殊に川柳には『素』だから非常に容
易であつて非常に六ヶしい、よつほごの肉體美でなくては『素』
である丈けに見映へがしない。恐らく詩的情操には俳句の着
物を着せても川柳の羽織をかぶせてもその肉體には何等かわり
が無いが如く各々依つて致すところ自らの道があるにも不拘川
柳をやつてゐるミツイ跳ね廻り度くなつて、結局戻る道が判ら
なくなる。(四〇頁へ續く)



山作杯

路郎

選

わらび狩男の方へこけかゝり
もぎ残す柿に病む子を慰める
うらゝかな旗日をつばめ斜に飛び
春が来た春が来たさて麥の飯
轉宅に餓の噂がつきまこひ
云ひ勝てゝかてゝ淋しき心かや
人の字に眠る母子の汽車の旅

歸省墓參

同	同	大	同	同	同	鳥	同	同	同	神	同	同	同	松
同	同	阪	同	同	同	取	同	同	同	戸	同	同	同	山
同	同	奇	同	同	同	耕	同	同	不	同	同	同	同	青
		可				民			然					帆
		愛												

歸らぬ小鳥

尾崎海洋人



此若者は種々考へながら、山道を登つて來た
「自分達も、やがては此様になる、何故だら
うか、其れが普通のことだらうか、否……」
足下の草は年寄つた赤黒い血を急ぐ様に下
へ下へとなびく、思い出した様に所々に渦を
巻き起こす淵の外は皆が冷めたい眠りに、さ
そはれて居る、背に負ふ母の骨張つた温みは
巢に返へることの出来ぬ小鳥の悲しさを思
はしめる、「母を捨てに行くこと」其れを心
配した遠い昔が、淡い哀愁となつて、腦の奥底
に、こびり付いて居る。そして若者の足は何
時しか鈍るのだ。
今、姥捨山の朽ち果てた木々は斯く昔の無力
な血を望む、淋みしきがある。

エアガール出現 (三句)

エアカールこゝが沼津であれが三保
エアガール燕の戀がして見たし
ラツパ飲みするこ向ふに晝の月
絞るだけ絞られてから醜になり
爭議團本部こ書いて斷狀
榮轉が尻こそばゆくなつて來る
貸金もあれこ苦しい借もあり
死を期して戀ふこは妻子知りもせず
月朧隣もうちも鳴る時計
生業にしても犬ひきあんまりな
豫後不良知らずに母は鹽を絶ち
山羊ひけに直角に喫ふ長ぎせる
宿題を忘れきつてる紙鳶の糸

同大	同尼	同同	同石	同同	同大	同同	宮	同同	同大	同同	龍	同同	大	同
阪	崎		川		阪		津		阪		田		阪	
同吐	同虛	同同	同山	同同	同樹	同同	水	同同	同英	同同	翠	同同	進	同
匂													一	
坊	白		夕		光		郎		郎		峯		郎	

「善信であれば、こそ泣いて歸られたのぢや」

◎ 左様な本（西田天香著ざんげの生活）を讀んでゐる間は未だ――駄目、薄蕨きの除れない證據だ、救はれさうもないネ、僕の柳師、飄逸作家の石竹氏が言ふ「何でも知つてゐる……」てな顔をしてゐるな！ 俺の顔付を見て、又他の

或る友が斯様な事を言ふ。皮肉とすれば恐ろしい皮肉だ。イヤ實際俺はコマツチヤクれてゐるかも知れない。

◎ヤイ俺の寢顔は宛も印度哲學者の如しださうなが、時にはコンニャクや、ねぎまの夢を見た事もあるんですぞ。

應接室の寄生虫

高峰柳兒

毎日の來客踵を接する應接室の火鉢に未だ吸へる吸煙が林の如くにいつもある。それは小使にのみ恵まれたる收獲であつた。數島、朝日、或はコハク等々があつた。然しこの恵まれた小使の領域も世相の反影が社



ぼり上げてみれば帽子も玩具なり
 野の歸り子の手が重い町はづれ
 母親はその縁談が氣に入らず
 柱だけ僕の歸りを待つならむ
 コンニヤクやねぎまの夢を見てるます
 片意地が辛い云へぬ唐辛子
 出ても行かれず勤續十年
 惱んでる脚氣へ蟻は荷をかつぎ
 母親のそつと指さす父の家
 春をくさして事務の閑散
 死にそうで死なぬ云はれ苦笑する
 親一人子一人春を恙なし
 平等に分けて子供等よく遊び
 正月を寝るさきめてる手内職
 公休日だけは口笛ゆるされる
 病める子を中心に夫婦の少し揉め
 宿命ミエゴイズムなる麻雀屋
 犬ころも歩道へ着いてホツとする
 叱られる身である事は知つてゐる
 秋さ云ふに食欲もなく病んでゐる
 子の咳へ眠れぬまゝの炭を足し
 獨り居る部屋にも暮の鐘が鳴り
 若夫婦子の抱つこぐら忙しく
 なぜそんな無理を云ふさ母も泣き

大	新	伊	神	登	島	同	大	堺	同	同	同	同	登	愛	同	同	同	大	豊	富	大	同	京
阪	潟	丹	戸	ヶ	根		阪						ヶ	知				阪	中	山	阪		都
桂	爲	松	桃	十	鐵	二	山	太	梨	長	詩	石	九	花	俊	四	八	龜	有	か	靜	同	相
舟	八	好	水	德	漿	朗	茶	路	風	二	樓	松	品	太	一	磨	步	坊	三	ず	香		界

○洋行得意の曲藝「火焰空中の飛行」と云ふやつです。そして一度だつてやり損ひがないです。素人なれば恐らく三回に一度は受け損なつてひびい火傷をするかも知れません。さて當の三人は此の危険な仕事を平氣の平左で片づけて行きますから問題はありません。そこで私のぐるりに好奇の目を光らせてゐる群衆を想像して見て下さい。彼等は表面此の光景をさも面白そうに見てゐるには違ひないのです。併し何と云ふ殘酷な萬一を享樂してゐることです。だつて「若しやり損つたら」と云ふことばかり考へてゐるぢやありませんか。一人だつてその演技を賞讃してやる人がゐないのです。

◇

新道の交叉點であります。此處は最近サラリーマンロードに於ける唯一の關所になつてゐます。嚴格そのものゝ如き我が忠實なるボリスマンの名は未だ詳にする由もありませんが彼のミスター・タナカに勝るとも劣らざるしゅんげん振りであります。彼のストツプは絶對的のストツプであります。彼の掌の



安西杏三

松丘町 二

安西杏三は目立たぬ作家である。こいふことは非常に目立つ作家であることを意味する。月足らずや當てこみの川柳に喝采する者達の眼には、彼が目立たぬ作家はない。人々が杏三君の作品に積極的な意味を認める時、作家杏三は颯爽として目立つ作家であるのだ。

水仙の影がもつ曲線美

小さければ小さいなりに張る氷
ヒヤシンス山の向ふは雪らしい
轉寢に話せし人の片ゑくほ
名刀の匂ひ思はず秋の空
誰にでも許す氣セルを差て出かけ
黒棗に驚かされて丸く寝る
許される積りの明日を抱いて寝る
訴へる氣持へ海はたゞ光り
一點に冬を集めて獨樂廻り
人形を投げてほがらかに笑ふ子よ
爪切つて羨むこみを忘れたり
コスモスの葉が憂鬱になれこいふ
女教師のコケツト黒い手袋に
道化師の頬に宿りしお正月

何らの野心も珍奇さもない表現ではないか、諸君がかう思つて素通りするならば、杏三は平凡な作家である。だが凡庸作家杏三は諸君の眼球の不鍛錬さを憐れむだらう。憐れまれても我々の眼には何の變哲もない句にしか映らぬよ、こいふ諸君に以下述べやう。

水仙の影がもつ曲線美

水仙の持つ影の淡さ。ちつと見つめた作者の心の影の深さ。一通りの眼なら醜いものから美を見つけるこみは容易だ。醜いものは屢々その醜さのかけに、思ひがけない美を藏してゐるからだ、だがこの句の如く美から更に美を探るこみは、お嬢さん眼光では駄目なこみだ。

ヒヤシンス山の向ふは雪らしい

何と朗然たる早春の詩情ではないか。

爪切つて羨むこみを忘れたり

爪は何の末練もなく肉體の一部であるこみからさよならした。刹那何かしら明らになつた。朗らかななるこみは楽しいこみに違ひない。羨むこみを忘れたのだ。かゝる瞬間は我々の實生

活中まことに人目を忍んで明滅する瞬間であつて、きよろ／＼した人間のきよろ／＼した眼には幻さも映じない一瞬間だ。

道化師の頬に宿りしお正月

かゝる詩の領域に關して、私は明瞭に語るこゝの危険を感じる。道化師を職業的ビエロとみるもよからう。或は諸君等自身とみるもよからう。只私の云ひたいことは、創作川柳の鑑賞に當つて何等かの洞見を必要とする作品の今日如何に妙きかを嘆ぜしめられる時、かゝる複雑性をかくも單彩に表現して、この句から不當な結論を導き出さないためには、讀者の誤たぬ洞見を要求してゐるさういふ一點なのだ。ある人の心理とは、その人の語る言葉そのものである。その人の語る言葉の陰翳そのものである。ミすれば、川柳作家の心理とは彼の歌ふ川柳そのものである。彼の歌ふ川柳の無限の陰翳そのものであるのだ。

以上掲げた諸句のみを以てしても作者香三君の纖細な感覺と純情と豊かな感受性を示して餘すところがない。次に進まう

枯草がすれてうつろの胸に來る
春來なばほゝるむこもありぬべし
眠るにもあすの命を信じきり
ものみんな焰となつて我を焼く
泣くなこは君もやつぱり他人だね
何時迄も他人が死ぬと思つて居
永久に死に覆面を脱すまい
遠く近く死の恐怖を弄び
恐ろしい言葉ばかりが口を出る
ニコチンで壁を黄色にそめんかな
棺側に友達一人居ればよし

一流韻癡詩人の心が頽廢してゐるから頽廢した作品を物する
ミ考へる輕卒は、喜劇役者が舞臺で人を笑はすのはその實生活
に於て常に喜劇を演じつゝあるからだと思ひ込む輕卒に等しい
頽廢してゐなければこそ頽廢が書けるのだ。眞面目な人間であ
ればこそ笑ひが演ぜられるのだ。

凡そ香三君の句は頽廢も喜劇とも縁遠いものである。併し
理論は同じことだ。諸君はこれらの句に作者の毅然とした健康
な心を感得出來ないだらうか。誠に噓つき共には眞實すぎる。
病人達には健康すぎる。次に進まう。

排泄の姿何處やら犬に似る
勝つこゝにのみ因はれし一日
偽善者が澤山居るさうをぶきぬ
犬だつて顔色位讀むよ君
あはてるなごこかそこらにパンがある
對岸でかれこれ批評するが
ふん／＼ききければ隣はろ過ぎる
洋館につぶされさうに歩いてる
偶像がなければ生きて行けぬのか
轉落の加速度を知る年の暮
逆さんほ打つて社長を迎へる
重役の世辭にも心ごがらせる
兄送りの片付けのうちミ詰める
社長室片付けられ親めめす
目を盗み時間盗み今日も暮れ
馬妾月時給取りミ満鼠
臺なしにされた夫へ手をつかへ
知識階級の精銳として知識の演ずる悲劇を、情熱を以て歌は

うとする特異な作家を我々はこゝにみる。殊に
馬 妾 月 給 取 る 溝 鼠

この句に於て背後に光る作者の苦笑の眼を見ねば、一句は癡言に等しい。だが總じて息が足りない。諸君はいふか。いかにも強い息吹に統一された時、作家杏三の完成の日でもあるのだ。ある批評家が云つた様に『何を置いても愚劣は演じまい。利口にならう利口にならうが凝つて形をなしたものが現代のナセンス文藝である』ならば作家杏三はこの言葉の意味する限りに於て愚劣を演ずる作家だ。だが愚劣を演ずることは必ずして愚劣ぢやない。同時に利口にならう利口にならうとする心掛も決して悪いことは云はぬ。だが杏三君のこれらの句を愛するためには、愚劣の苦い味を知つた人間でなければ駄目な事だ

友 の 結 婚

奪ふものさがす男の二つの眼
奪ふものを探す二つの眼が結婚したお前の眼の全部だ。それが結局男の眼の眞實さ。だが作者は苦笑する。俺の眼でもある。そして呟く。『俺は自己を偽れない。自己を偽れない人間が他人を偽れる筈がない。奪ふものを探す俺の眼は、與へるものを藏す俺の眼だ』結論へ進もう。

凡そ作家の脳中には、数々の互に異質な個々の組織が奪き合つてゐるやう。それらのもつ錯綜した影像が即ち作家の心だ。この影を明確に捉へるさいことは至難な業である。殆んど不可能事だ。だがこれらの影の本體は何か。精神は肉體に比べて遙

かに自由に神速に運動する。(眼を通じ耳を通じて飛込んだ外來の精神をそのまゝ我物顔に振廻せるのは之が爲めだ。藝術に近い嘘の複製の可能も之が爲めだ) 若し當代川柳作家の脳中に滲透して雜居する諸精神を覗くことが出来たならば、そこには……無自覺無思想が聊かの障害もならず、すべては趣味であり、趣味を持つことが生きることであつた元祿以後の江戸詩人の眼を現代に守つて、何等悲しむこともなく古句の傳統に新意匠を求めて嬉々とする心。哲學だ、神祕だ、マルクスだ、イデオロギーだ……は涙線だ、太陽だ、戸惑つた概念をタンクに乗せて乗り廻し乍ら、いやはや川柳はこんなものささ囁く心。通人の溜息が川柳でけすこのうゝ筆を掌めてゐる心。眞實さ事實さがこんがらかる心。哀傷をきらつて浪漫に墮した心。生活を通きかへた生活派の心。やたらに喇叭の吹きたい心。等々が渦巻いてるやう(柳壇に於ける現代のハムレットの面貌は飄々として書きあててゐる。悲しい懷疑だ) かくの如く文藝の道に於て、精神は文體を持たぬ(ボオル・ヴァレリイ) 文體を持つものは肉體だけだ。従つて我々川柳家にまつては、川柳の秘密は肉體の秘密だ。川柳を通じて語られる川柳家の性格さは、川柳を把握して歌ひつゝ一瞬も止まる事なく獨特な行動をするその人の肉體全體をさす。

諸君は以上杏三君の作品を貫く太々しい情熱の線に、川柳發祥以來宿命的に忘れられ續けてきた肉の匂ひを、血潮の味を認めないか。



難解史句續稿

岡田三面子

- 1、繪具谷、所在不明
佛畫師の名譽を残す繪具谷
一ツ地に豊國山や繪具谷
一〇九、四二ツ
- 2、覺範、近松作吉野忠信にては釣し斬不明
範ささり覺はふらり吉野山
一二二甲、二カ
一四七、七カ
- 3、覺範に高尾冥途で主もかへ
覺範になつてふらり春の鯉
一五〇、二カ
- 4、愈張法橋、左の二句に斯く古註あり、詳傳知りたし
これに居りますミ愈屋は罷出る
一八、二八カ
- 5、東里、何人か、いづれ襲人且眼一(可上は百眼、眼鑿の元祖)
神明の祭に東里出ればい
八一、二〇カ
- 6、可上には九十九足らぬ東里が目
百一つあるは可上ミ東里が目
一一六、一〇カ
一二二別、一一カ
- 7、片岡山、所在大和下葛城郡 誰のさん歌か
聲残す片岡山の杵手鳥
九一、二六カ

- 8、米で馬の足を洗ひ水に見せる、蒲生直秀にては不明
城中の九死は米を水に見せ
一一九、二三カ
城中の水切れ馬で水をぎ
一三六、三四カ
- 9、似せ物の水ミは敵も氣が付かず
樞風呂の難、徳川(一)何代將軍何所で誰の爲
九八、五二カ
- 10、御武運は工んだに湯も水ミ成り
樞風呂は水に成つたる御高運
九六、二四カ
もるこは知らぬ樞風呂の事
一〇二、四二カ
一〇九、三七カ
- 11、九里山、張良が笙を吹いた九里山では左句不可解
九里山をおつ挟んでる越後勢
安九、義二カ
雲なく九里を手取る御寶藏
五六、四カ
- 12、月水、講釋師、寶名及び時代を知りたし
月水が見立て、張れば側へ張り
寶七・一・一五カ
身振るひをするミ月水讀終り
一〇五、一二カ
身振るひをするミ月水讀仕舞ひ
七一、二五カ
- 13、五百挺、紀州家にての事ミあれど、詳しき事不明

- 15、通圓、宇治南岸の大慶庵、時代を知りたし
- 14、孝女芹摘、傳記を示教ありたし(日本)
根を堀つて聞けば芹摘、稀な孝
灰汁のない芹を車へ太子積み
還御には重き孝女、牛も知り
芹を摘む孝女、地下より雲の上
芹摘を召し囁のあ○知給ひ 銚一五・七・一一頁
- 13、逃げずして老ひたる父に打たる、隨身公助にも此事あれぞ
高位高官の誰やらに此事ありしと思ふ(姉妹句澤山)
つまづくを案じて逃げぬ杖の先
和らかな杖が孝子の身にこたへ
叩かれて痛くないと悲しがり
一四二、二六ガ
二六、三〇ガ
- 12、小六、蹴鞠家小六の傳知りたし
高足で雲の上まで小六の名
念に念入れて吳服を縫殿助
吳服後藤、時代経歴承知したし
九〇、四三ガ
- 11、肝玉をぶち抜く初手の五百挺
三寸の的は外さぬ五百挺
納まればいゝと又歸る五百挺
五百挺まんまこ残る御献上
御持ち筒叱つて譽めて五百挺
家の寶さなさばやこ五百挺
鐵砲も其後は錆びぬ御一言
一五九、一四ウ
- 10、乙・三五ガ
一二乙・四六ガ
六四、六ウ
明三、宮三ガ
三三、三八ウ
天五、梅一ウ

- 20、蠟燭の御意、全然不明
蠟燭の御意、次の間で油汁(汗?)
果敢なく消えし蠟燭の御一言
一三五?
- 19、鎗持助、傳記不明、何かで見たれと思ひ出せず
重い鎗奴忠からおつべしより
鎗の柄を切つたも忠の切れつ端
治世の高名鎗の柄を切つて捨て
尚姉妹句あり
一三八、一ウ
八七、四ウ
- 18、保昌、頼光の四天王外の一人武者、但左句不明
保昌は巨燵の側に大あぐら
保昌は巨燵の側に小鍋立
保昌の門戸に暫く紙のほり
鎗持助、傳記不明、何かで見たれと思ひ出せず
寶一一、櫻二ウ
六一、二〇ウ
安六、松六ガ
- 17、簀笠の助、何等かの功に因、此異名を拜領せし幕臣、傳記不明
ソレ笠ヤレ簀せつかちな薄の徳
雨ならで敵を凌ぎし簀笠
御代に隠れぬ伊賀越の簀笠
實盡しの姓名を御拜領
晴天に簀を持たせる御立身
此外十餘の姉妹句あり
一三九、二七ウ
一一八、三三ガ
天四、松一ガ
五〇、一ガ
- 16、通圓はウジある家の立場茶屋
通圓が茶屋で舊(古?)跡の道を聞き
梅干之助、原文振り假名ばや之助、傳不明
名で聞くに年寄らしい梅干之助
簀笠の助、何等かの功に因、此異名を拜領せし幕臣、傳記不明
八四、二二ガ
三二、一二ガ
一三七、一〇ウ

難解史局

(新年號發表再録)

岡田三面子

後撰集・年経れば我が黒髪も白河の
ミヅクむまで老ひにけるかな檜垣
の事か？

盜賊の住み家も古歌の徳て知れ
白浪の行術を古歌で御捌き
御仁政初霜の句で繩が解け
霜の發句で解けたのは繩目なり
御捌も歌屋もきいた鳥の聲
勅免も又なか／＼の名歌なり
百貫のかたには惜しいお歌なり
夫婦別れるは櫻と梅の歌
神祇で寺の言葉も御笑ひ
かはらんの一首は神も御納受
餘り出来過ぎ叱られる松の歌
目出度過ぎたで能官は叱られる
法の徳牛の涎も太和歌
牛の涎も和歌となる法の徳
遊女の譽れ勅撰に名が残る
後撰集の檜垣？
立つ鳥に筆を残して一首詠み
裏に出て手爾葉は花に寄せる戀
彼は留め此れは音を出す和歌の浦
鶯と雀和漢の詠み人なり

六三、一〇
八九、二二ウ
一〇〇、三六オ
一〇九、四ウ
九八、六六ウ
一三五、四ウ
四一、一八ウ
三三、二〇
六、三七ウ
九八、四八ウ
三九、三三ウ
四九、二四ウ
六一、一六オ
一一三、別六オ
七二、二ウ
五六、一八オ
七八、二オ
五四、二〇オ

散つた後と迄香の残る窓の梅
名の高き折つても匂ふ窓の梅
螺の殻へ御詠歌を百首詰め
前出も口出も無く思ひきや
そここそそれ？
直き歌曲れる水に一首浮き
直ぐる手爾葉が曲つたる水に浮き
曲水の宴とすれば詩の筈双紙洗とすれ
ば曲れる水不明
違勅の譽れ鶯と八重櫻
御用意の雨具 無用な歌をよみ
いそがすはねれさらましをのか事
清水の歌で色紙を尋ねて
歌人へ小鱗生臭い袖の下
春雨の御歌吾妻の御土産
ぐんじの草紙の意味はほたえ經
萬葉も詩經も薫る梅屋敷
さまの板開き古物を歌にやり
上の句へ玉といふ字を折り給ふ
五七五の枝葉に分ける桃櫻
遊女のほまれ 勅選に名が残る

三六、三五オ
三、三二オ
六七、二〇ウ
三三、四一オ
六六、三三オ
七二、一ウ
九七、二二ウ
二〇九、二四オ
二五、一オ
九〇、三ウ
八三、六八ウ
四七、一三オ
安九、一〇オ
九八、六三オ
七二

遊女のはまれ藤原の太夫號
流行く歌壓留めぬ御恨
皇統を櫻で繼穂のよそへ歌
この花の歌御連枝の義理を折り
三鳥の一羽はこゝにすみだ川
沖の鵜では傳授にならぬなり
座頭一先づ方を置く
桐の歌書記の船出も一葉船
腰折れにならぬ古歌あり
和歌の一ナ物みけなして猫を捨
岩城の一帳わらをもて柵を切り
比良の京 かぢらんだ手で
さいいの殻へ御詠歌を百首つめ
時雨れけん 此笠箇に紙合羽
寄るべき御身しがらみと詠み給ひ
去りにくい訣は櫻の返歌なり
美しき裏表ある花の歌
亡き魂の歌で古血へ蘇へり
偽りの言葉の花はつげに咲き
黄 楊
火の中で妻を助ける歌を詠み
身の立消は白灰と詠んだ後
灰にする反古からげつと立つ雅名
燃ゆる修羅草によそへて出殘し

三三、三二オ
一一八、四ウ
一三三、一九ウ
一〇〇、二九ウ
二九、九ウ
四八、？
一一八、一七オ
一三七、二九ウ
一〇二、一三オ
一四五、二首書オ
七、一〇ウ
九八、九五ウ
九九、一〇四ウ
三四、五ウ
八九、三三

大	大	榮	大	榮	大	同	榮	同	大	同	大	同	金	同	京	同	金	同
阪	聖寺	ヶ池	阪	ヶ池	阪		ヶ池		聖寺		阪		澤		都		澤	
素	一	智	谷	鶴	辻	童	愚	同	白	同	涼	同	木	同	利	同	白	同
月	寛	恵子	師	峯	浪	史	寵		花		哉		偶人		郎		雨	

は夢の中で雪降りを見て居て、ふと眼をあけるとやはり雪が降り出して居たといふような感じが出したかつたと思ふ。



くるたびに母の白髪の増すばかり
客の来る度に鶏へつてゆき
失業は妻に詫びたい氣持なり
記念樹の大きくなつたクラス會
眼をあけばやつぱり掌が降つてゐる
諦めてチヨイナくで炭を焼き
越後獅子の太鼓に堅く戸を閉し
寒月が落した酒に宿つてゐた
御詠歌は濟んで講中酒になり
やせて來て我家が戀しくなつて來た
下女の手へ冬は容赦もなく迫り
大圍爐あぐらの下で爛が出來
巻布圍小供すけなく向きかはり
その内に見舞ふくが二年越し
弱い氣をそつこ隠してきなりつけ
夜ざくらの下で戀しい人に逢ひ
ステッキを廻していざ散歩せん
京人形お前の頬にある指紋
除夜の鐘まだかくこ子は眠り
久方の友の便りの不足税

同	同	大	羽	同	大	荳	大	大	同	大	神	大	同	同	大	同	大
詩	町	阪	衣	丸	阪	ヶ池	阪	之莊	荳ヶ池	紅	戸	阪	荳ヶ池	銀	大	呼	か
郎	子		松	葉	之	操	春	天	花	緒	鵲	友	煙	柳	久	子	子

▽愛緒君の「寒月」の句も同様わかりにくい句であるが、寒月の感じだけは味へる。落した酒に無理があるのだ。

▽大呼君の「下女の手へ」は、平凡な着想だが「容赦もなく迫りて生して居る」。

▽長一郎君の「京人形」は、頬にある指紋だけではものたりないのである。その指紋が戀人の指紋であるか、亡き姉の指紋であるか、川柳家はそこまでつき進めて探索する事も必要である。

▽今月號のものには中々佳句が多かつた。五月號發表分は集句も非常に多いから、只今から大いに期待して楽しみにして居る。

▽投句者全部に涉つて批評なり、御注意を申しあげたいのだが、紙面が許さず、それも出來ないから、評した分を参考として少しでも得らるゝところがあれば幸ひである。

▽今月も私自身の句は出來ない。句が生れぬときは、じつとうちらにもつて居ればいつか出てくるといふのが私の持論である。横着かもしれないが、やむを得ない。

▽前號で申しあげた「はるか希望」を二月二十八日に刊行、吊詞を頂いた各位にお贈りした。その節御丁寧なお言葉やら御感想を頂いたが、多忙でついそのまゝに過こして居ます。こゝで御厚意を深謝致します(ひろし生)



火華

つまらない人間を相手にすれば
家名にかゝるし、きりとして黙
して居れば火華が出ない。衆愚
に伍して賢を保つことの難き所
なり。(雨町生)

「荒海や」の句について雨町のな
した批評は決して新しいとは言
わぬ。だが、むの字君「詩
としての翁の偉大さ云々」テナ
ことは中學校の先生のセリフだ
そして立派な老舗であるぞ
嗚呼！芭蕉が偶像化された悲し
き事實よ！！(雨町生)

本誌三月號の「粒々集」に
水深く澄めども水は清からず
婦選論所詮女は女なり
の句を見る。作者瀧明君は新興
川柳家を以て自任してゐる一人

であり、筆者は君のために「屑
々集」のページなきを歎く一人
なり。(雨町生)

粥を煮る草にこと缺かず春は
佳き、町二、何といふ素派らし
いボエチカルリズムであらう。
それに吸つても「撞球よるこべ
こゝろをくつて」轉び仰け、出は
出たがひとり淋し松の内の
やうな句を不朽洞主人に要求し
たい。だがこれはむの字生一人
の希ひかしらシラシラ。(むの字)

火華へ！一番余の兎杵郎(355)欄
「先生」問題について荷風を持ち
出した。あれは吾輩が教へてや
つたのを、自分のものにしてる
のだ。兎杵郎は荷風を識るの柄
でなし。ぐうたらは、番余の常食
とみえる。(紫)

辛未新春の番余川柳社の會に福
助足袋の廣告に利用されたモデ
ル女を引張り出し、酒を呑した
りしてまで出席者の九十二名を
ほこりとして喜んでゐる。
こゝまでして柳界を墮落さすこ
とに全力をあげる御大王府の氣
が知れない。(赤の字)

川柳の社會進出だと云つてマ
ネキン嬢まで雇つて力のない川
柳家が柳界にのさばつてゐる。

これでは進出でなく柳界の退
歩ではなからうか。京都室町柳
壇の主催で後援者は京都番余社
京都川柳社、川柳街社、川柳タ
イムス社などである、なんとし
た川柳界になつて来たものでし
やう今にこんな社が密合つてエ
ロ一〇パーセントの句會でも
開くだらう。(同)

柳壇の恩人久良岐、劍花坊兩翁
の三十年記念大會を東京で催す
豫告がされてゐますが、平素兩
翁を尊敬もせず、川柳、狂句の
混同家としてきり川柳家の別
人扱いにしてゐた筈のきやり吟
社や番余川柳社が主催してること
が何を意味するのかと思へば
これを機會に隠退を強ひる計畫
だそうで、果して兩翁は出席
するかどうか。(同)

迷論家として柳界に知られて
ゐる溪花坊君の句はだん／＼と
低下しつゝある。借家の一軒で
もある間に高野山に川柳幼稚園
溪花坊先生の碑を建立しておけ

ばい、だらう、それから自需費
入りの句集を出版して置くこと
だ。勿論自費出版。(同)

川柳イデオロギイの脱線といふ
のが堂々たる柳誌拍子木といふ
のに發表されたのを讀むとお上
品で納まらんとする人間の言葉の外
は下品なものだといふ、意識に
囚はれて、熊公八公の言葉では
詩的價值なしといふ、誠に技巧
家となる事は眞實なこれほごま
でに押し隠し偽らねばならぬか
と思ふとお氣の毒を通り越して
馬鹿氣た論理で、それこそ川柳
イデオロギイの脱線振だと勝茶
の次第だ。(十三生)

岡崎城雨郎氏へは次號で御返
事する積りだ。雨町君の今月の
亂談論の餘論に於けるフオルマ
リズムに對する疑問符は鋭い。
同君が例として擧げた數句の如
きは、その形式が、これらの句
と同一の素材をたとへば、柳樺
的表現に依つて作つた場合の形
式などに比べて、その兩者の形
式が決定する内容の優劣相違を
眺める外あるまい、と私は考へ
る(町二)



月評
作家展望

路 紋 琴 山 町
太 郎 人 雨 二
樓

伊藤 愚陀

- 1 マダム腕が煙の如くにより
そうて
- 2 金貨の夢見て豚の如くに眠つ
たよ
- 3 口あいて惚れてゐるのがまこ
となり
- 4 KISSの唇が河豚に見へま
す

山雨樓——愚陀君の句は之までから相變らず同じやうな境地を歌つてゐる。ことに青春の情熱に燃えた戀の句、夢の句が多い。之はロマンチストである君の本音であつてまさしく愚陀君の純情に外ならない。かういふ夢

を見る時代は人生の誰しもが経験すること
で我々も嘗てはかういふ時代のあつたこと
を思い浮べるが、僕の記憶では、愚陀君のや
うにこんな思ひ切つてよう歌はなかつた。
今日我々の年輩でこれらの句に接すると、何
だか顔をそむけたいやうな氣持もするが、そ
こに尙ひきつつけられるものを感ずるのは、同
君の情熱が盛に燃えてゐるためであらう。
ひろし——愚陀君が川柳としての新しい表
現形式、新感覺派とでもいふべき句を盛に作
つてゐることは、川柳界に一エボックを作つ
たといへやう。文壇的にもう新感覺派が凋落
を見せてゐる今日、引續き同じタイプの句を
見せられることは、鼻についた氣持がぜんで
もない。
琴人——今ひろし君が云つた説の後段の方
のお説、鼻につく云々、そのことについて一
寸の考を入れて見たいと思ひます。愚陀君は

かうした感覺的の句に初から一貫してゐるやうに思はれる。そして今日の句を見ると非常に進化してゐる所を認める。句が整うてきたと云ひ得る。時代を反映することが詩としての藝術であるなら、若き同氏の未來の進展が同じ感覺句としての上に於ても、ごういふ風に進展するか、私には期待を以て見られると思ふ。その點で少しくひろし君との意見が後段に於て相違したやうに思はれる。
ひろし——かうした新しいスタイルのもの

は、それが清新であればあるだけ、より價値を増すものであるが、初には驚異視されたものでも、それが一般の常識にまで普遍するならば、藝術としての價値を失ふ虞が多い。だから作家の感覺は常に類型に陥らねやうアノーマルでなければならぬ。たとへばオーケーといふやうな言葉も、初めてモダンボーイの間でのみ交換されてゐる間は、清新な感じを待つてゐたが、誰もがそれを口にすると、うになればつまらないものになる。勿論愚陀君の句をきうしたものだといふのではない。私も愚陀君の句の進展してゐる。併しこの句にしては無論異議がないのである。併しこの句にても4の句にしても、これらは過去に愚陀君がもつとよく歌つてゐるやうに思ふのである。だから僕は愚陀君は今同じ處を足踏してゐるのではないと思ふ。

琴人——先輩者としてのひろし君が今の説は一應尤もにきこえる。けれども句を批評するとか批判するとかいふ場合、自己の持つてゐるところの十分なる素養の上でのみ批判するといふことは、ちと酷だと思ふ。愚陀君の今進歩する過程に立つてゐるものとすれば、愚陀君が今日まで進んできてゐるといふこ

とは、ひろし君の説にも認められてゐる筈だ。然らばさうした過程を見て、そして今少しく親切な批判があつて欲しいと思ふ。それは鼻につく云々として愚陀君の境地を未來なしとして否定されたやうにきこえたので、私が批難したのである。

ひろし——僕は愚陀君に將來がないと思ふものではなく、むしろ非常な期待を持つてゐるものである。だからこそ愚陀君の作句上の偉大なる功績を讀へ、さうして今後の方向轉換の下に如何に進むかといふことを翹望してゐるものである。つまりもう新感覺派の表現では、新しい愚陀は見られないといふことでもある。

山雨樓——それは同君の生活が變らなければ望まれないことではなからうかと思ふ。今日までの句にしてもやはり君の生活を歌つてゐるのに相違ないのであるが、風托のないそして青春に燃えてゐる君が、かうした白日の夢を語るのも不思議はないことで、むしろ同君の眞實であるといふことが云へやう。新感覺派といふことについても、文壇的には多少凋落の氣味がないでもないが、柳樹の如く感覺味を尊重する世界にあつては、何處までも新感覺の芽を伸ばして行きたいと思ふ。これ以上にごし／＼鋭く深く進んで貰ひたいと思ふ。要は作者の特前、作者の純情乃至は作者の思想を百パーセントに表現して貰へばいいのである。

ひろし——愚陀君は戀をする男でもなく、戀の出來得る男でもないであつて、戀をしてゐるが如く見えたが男だと僕は思ふ。實は僕も以前には山雨樓氏の如くに觀察してゐたのだが、此頃は只徒らに幻想を追つてゐる

愚陀君を見るやうになつたのだ。

琴人——幻影を追つてもそれが詩的價值あるものを創作し得たなら、即ち作者の藝術となるのだ。愚陀君の境地といふものが、この四句の上に立派に眞實のものとして表れてくる限りは、それが詩である。それは尙私達氏が氏の句境の向上を願ふことは、山雨樓氏及びひろし氏も云ふ如くである。問題は表現形式の形式論にあるやうだ。これは重大な問題だと思ふ。この可否を少しく討議しなければならぬ。

路郎——先程から聽いてゐるうちで、愚陀君が新感覺派の作家であるといふことは首肯し得られるが、新感覺派の作家として「エポックメーカー」を作つたといふことに對しては同意しがたい。一エポックメーカーを作るといふやうな言葉は餘程注意して云はれないと、そこに誤謬を生ずる恐れがあると思ふ。たとへば啄木が從來の短歌からあつた形式内容の異つたものを生み出したやうな場合に用ゐることは、至當であらうと思ふが、愚陀君の場合にこれを用ゐることは當を得ない。亂耽君の如きはそれ以前の「新感覺派の作家であるに見ても、いかにも」が出来ると思ふ。單に亂耽君に限らず新感覺派の作家は他にものを見ることも出来るからである。ことに愚陀君の新感覺の傾向はまだ目が見えない。昨年の春頃の句を見れば單なる叙情作家であつて、昨年末より今年へかけての作品の進展が、新感覺派の作家と思はせるに至つたのである。私自身の觀るところによると、まだこの境地を引伸して、より鋭い新感覺派の作品を生むべきだと思つてゐる。同君の句には先程山雨樓君が指摘されたやうに、

戀とそれから夢を詠んだ句が非常に多い。それらの戀や夢の句には眞實性が非常に稀薄で、ひろし君の述べた幻影を追ふといふか、弄ぶといふか、兎に角戀を戀するといふやうな若き詩人の心が盛られてゐる。そのために稀薄や眞實性が幾分詩美によつて、救はれてゐるに過ぎなくともつと人生を味ひ、俗にいふ苦勞をするならば、句に深味が加はつて、四句の中で「口あいて惚れてゐるのがまことなり」の如きは單なるロマンチストの境地を出てゐると見るべきであらう。新感覺派の作品といふ意味から行けば「KISS」の唇が河豚に見えまう」の如きはまた、餘地があるやうに思ふ。

紋太——私は愚陀君の平生を知りませんからこの句について申します。大體甘つたるい戀の句は困るのですが、愚陀君のやうなかうした句であればいいから見せて貰つても喜んで拜見することが出来ると思ひます。マダムといひ、金貨惚れてゐる、キスなど、私の常に接しない境地を句材に、せられる愚陀君を羨ましくも思ひます。句の何處かに打つてやつたやうな淡白な氣持が、漂つてゐるのを感じます。「キスの口が河豚に見えます」といふ句を讀んでみると、愚陀君がかうした句境を愛してゐるのかゝないのか、多少迷ひますが、今のうちにかうした句をうんと作つておかれることを希望したいと思ひます。

山雨樓——うんと作ることにして思ひ出しましたがい、いつと同志が句會で澤山の題を出されることはまことに、苦痛であるといつてゐました。多作といつても濫作は困りますが、同君の年輩ではその溢れるやうな元氣

で、ざし——作句上の修練を積まれんことを祈つて已まない。又さうして切つては捨て、ある間に本當の光が出てくるやうに思はれてならない。現在の状態では作り足りない憾があるやうに思ふ。

紋太——うんと作るというのは、うんと数を作るとも云へるし、うんと力を入れたる作ともと云へる。さう思ひます。僕は「豚の如くに眠つたよ」といふ言葉はたしかに頂戴出来る。金貨の夢はお返ししても路郎——愚陀君の句をすつと見て来た自分とて、句會で澤山題があるのは困るといふ言葉は首肯することが出来る。愚陀君は題詠作家ではない。今の間にうんと作るといふ注文は僕も賛成する。もつともうんと作るといふことは力作を續けよといふ意味で必ずしも數の問題ではないことは、紋太君の云はれも通る。これは少しも横道に這入るかも知れんが、川柳家は三年や五年ですぐに一人前になつたかの如く考へて、それ以上の進歩を期しないといふ共通的な缺點を持つてある。巧いといふ言葉にも作家によつて程度がある。巧いと褒められたもので行詰る作家の餘りに多いのは、柳壇のために可哀しいことではない。愚陀君の如きも巧みな作品を見せてゐるが、これから本當の作家としての第一歩を踏み出したものとして、力作されることを切望したい。

福田山雨樓

嫂の死

- 1 まだ立たぬ兒もほつといて何處へ行く
- 2 經を讀むそのまなざしのづるいこと

- 3 雪降れば雪をつかんで食ふ父よ
- 4 下駄の緒かかたつばしから切れてあり

5 制服へ女給迂闊な眼を投げる 6 子供等に熱いばかりの薬風呂

ひるし——常に確固たる信念をもつて川柳に精進されてゐる山雨樓氏の作品は名實共に備はる云ふべきであらう。その句も氏の生活がよく滲み出てゐて謹直な氏を見る心持がする。(一)と(四)(六)は子供を愛される家庭生活を見ることが出来(三)の句は氏が川柳を好まれる一面の心持が出ており、氏にして初めて雪を食ふお父さん振りが隨知と見える。(五)の句は嚴めしい氏が武骨げにパリに突立たれた姿が浮ぶ。(二)からは氏の川柳的鋭いもの、見方を覗ふ事が出来る。紋太——此の作者の性格を謹直だと云はれたが、さうも油斷のならない辛辣さがある。迂闊に氏の前で變な眼付が出来ないと思はせる。(五)の句だつて此の作者が謹直の中に多分な情熱の燃ゆるものを持つてゐる事がわかる。その投げた女給の眼を見つけてゐるところなどが油斷にならない。六句を通じて云へば氏は川柳的の技巧を捉えやうと思ふ感じが確かに認められると思ふ。それは(六)の句(一)の句などに面白いと思はせるものがある。その思はせる點がさう云ひたいところである。

路郎——山雨樓君の句には期かな感じのする句と重々しい感じのする句とがあり、それ等が俳句から糸を引いたものである場合が多い。又一面には川柳味技巧の句、特に眼立

たぬまでも何處かに川柳らしいにほひをさせた云ふ様な句がある。こゝに六句は全く俳句と縁を斷ち切つた川柳味の句ばかりである。(一)の句の如きは季もなく讀まれてゐてしかも川柳としてのよりよき境地であると思ふ。(六)の句の如きは何處かに川柳を拵らえた云ふやうなほひがある。(四)の句の如きは一讀して從來の川柳味を肯かされ微笑まされるものがあるが、再誌三讀するに至つては、何だか川柳にだまされてゐると云ふやうな感じがしてゐる。この句の如きは山雨樓君の境地としては一寸珍らしい境地で、ほんとはもつと正直にもつと重々しいところ、その本位があるやうに思ふ。(二)の句(五)の句などに付ては、紋太君の説は面白いと思ふ。

琴人——山雨樓氏の句を通じて、句を味はふ時、句材の括み方表現法等を教へられることが多い。川柳は愛であるとは私は同氏からは聞かないが、そう云ふところに根底があるやうに覗はれる。それは(一)の句(四)の句(六)の句それから前號にも子を思ふ父としての愛の真情を吐露されてゐる。それで私にはさう思はれたのである。さきにも云つて私氏の句を通じて色々致へられるところのものと云ふものは、如何に同氏が川柳なるものに精進してゐられるかと云ふ事が、はつきりとわかるのである。尙路郎先生が一句々々に付いて解かるほどと肯かされるのである。

町二——氏は、句の表現形式から云つて統一のない作家であると思ふ。それは氏が新らしい川柳に異常な情熱と精進を傾けつゝ、一方柳柳の表現形式を捨てないと云ふ點にある。

然し作品には、完全な統一性と云ふものはない。あれば機械だ。と云ふ意味で氏の態度は是認し得られる。少なくとも川柳に付ての作家としての理論を持つてゐられる點で、敬服に價する。結局文藝作品とは傳統の上に咲く花である。この言葉は説明しないに誤まらるる虞れがあるが、傳統の鑄型に嵌めると云ふ意味ではない。(五)の句の如き單なる傳統作家では云へないであらう。(二)の句は一種の穿ちとも見えて、曾て牧師が片手に聖書を持ち、胸間の太い金鎖をまきぐり乍ら血の滴るピフテキを食つた口で、神を説くと云つた意味の詩があつたと記憶してゐるが、それと同様な着想である。私は挙げられた六句の中で(三)と(四)の句に共鳴します。もう一句「腹が鳴るそのあとさきは眞人間」空腹なる人間が食物に向つた前後に於てのみ如何なる惡人でも偽はらぬ眞人間の眞實の姿に返つてゐると云ふ鋭い把握に感銘しました。

琴人——眞人間の句町二氏の説に共鳴致します。

路郎——そのあとさきは眞人間でなくて、そのときが眞人間の意味ではないだらうか。でないさ腹の鳴るそのときだけが、嘘偽の人間であるやうにとれるがそれは逆に解すべきであらうと思ふ。僕の聞き違ひかも知れない町二——そのあとさきの「あと」は満腹したとき「さき」は空腹のとき、何れも腹が鳴るものと見ての解釋です。

路郎——僕の「腹が鳴る」の意味は空腹な人が食物に向つたとき腹が、鳴るその僅かな時間の意味するのでも、一つ他の言葉で云へば咽喉が鳴ると云へば、眼の前に非常に食欲をそゝるものを置かれた場合の、そのときを意味するのと同時である。

町二——さうすると「そのあとさき」はその瞬間を云ふ意味ですか。

路郎——「その」は咽喉がなるその時間を、或ひはその音の意味してゐるのである。でなければあとさきと云ふ言葉が一寸受り難いと思ふ。例へば食事のあとさきと云へば食前と食後を意味するのである。

琴人——町二君の解では、その食前食後の意味で解してゐるのだと思ふ。つまり文字の省略法を用ひたと云ふふうに、私には思はれる路郎——では、食前と食後が眞人間であると云ふ意味ですが、それでは平凡だと思ふ。

琴人——嬉しさと感謝の意味を眞人間の本体をして下五にしたのだらう。

路郎——僕は人間と云ふものはいつとも偽りの多いものである。しかし飢たるとき、その慾望を満足とする、目的物に對して腹がなつた。

琴人——わかりました。

路郎——その瞬間こそは人間、本來の心に立ち返る僅かにその間だけが、眞人間であると解したのであるが、食前食後の長き時間、眞人間であると解すれば、われ／＼何時でも眞人間であると解するやうに思えて、句が平凡化しはしないかと思ふ。

琴人——廣義に解釋するときとも思はれるやうであります。

町二——眞人間の意味は、先生の仰つしやる通りですが、その「あとさき」の表現形式は例へばいつしとは、同じ意味の言葉であれば食物に向つたときの瞬間を云つたものと云へませう。

路郎——さうすると句意の落付くところは

同じであるとするれば、「そのあとさき」と云ふ文字の使用法は一つの技巧としてある疑點をさしはさむべき餘地を生じたのであるから、句の引しめ方の上に、欠點があると云はれても仕方がありません。

紋太——僕のとり方は大いに違つてゐる。この句の表現から受取れるものは、腹のすいたとき又は貧しいとき等には恒心を失ふと云つたやうな想であると受取ります。路郎氏の説と作者の考へとは、人間の見方の深淺の度が違つてゐるところから起る行き違ひではないかと愚考します。そして僕はこの句がさう云つた道學的な理屈が潜んでゐる句として拜見しました。

琴人——この句には道學の意味が含まれてゐないやうに思はれます。

紋太——僕のやうに解すればとれると思ふ。つまり腹のいゝ時は道徳を失はないが、腹の空いたときは動物的な感情に支配されると云つた觀念が作者の狙ひ所ではないでせうか。その見方の相違が、僕の説と諸君の説との相違になる根本であると思ふ。

路郎——紋太君の説によれば確かに道學的な句である。がさう解すればこの句は臭い句であり、平凡な句である事は前に述べた通りである。

紋太——さう解し得ないでせうか。「腹が鳴る」ではつくり切れて「そのあとさきは眞人間」その眞人間と云ふ言葉は眞の人間性を持つた人間とは解し難い。普通世間で使はれてゐる眞人間になつたと云つたやうな社會的不正を行はない人間を云ふ意味を持つ言葉だと僕は思ひます。(四一頁へ續く)



柳

の 絮

長 野 吉 高

まへがき——私の立場として多く學壇並びに文壇方面からモデルをとるが、モデル問題のやかましい今日、狙上に載る者は私にメンじて何卒むかつ腹を立てない様にしていただきたい。夏目漱石は墓石の下でせうら笑ふかも知れぬが生憎と私は猫を飼つてゐないので、猫にシヤベラス事は出来ない。所詮は「柳の絮」だ。風に吹かれて何處まで飛ぶやら——。

(一)

「チエツ、遅かつた!」
窓の所ミテールブルの周圍に僅かな空間を置くのみで、まるで本で造つた穴倉の様な感じのする何處もをぎつしりミ本で埋つた至極殺風景な書齋の椅子にふんぞり返り、埃臭い本に顔を押しつけてゐた雨軒居士は、猫庵君が這入つて来るなり先づ聲を絞る。

「遅かつた?留守の間に何か喰つたのかい!」

猫庵君、けろりこして懐手のまゝ、足で椅子を引き寄せて其れにぎかりミ腰を下ろす。

「冗談ぢやない。一体、君は今迄何をしてゐたんだ?」

「いやに慥突を喰はすね。何をしてゐたかつて、床屋から歸りにバン屋の隣居に出逢つて、到々引張り込まれて甚を打つてゐたんだがね——」

猫庵君は、髭を剃り込んでスベくする頬をつるりミ撫で、言ふ。寫りの悪い、チャールス・ディッケンズの複製寫具を見る

様に、極めて深刻で複雑な顔した猫庵君だが、床屋の手にかゝるミ多少相好が變るから妙だ。

ディッケンズ式に、前額が偉大に膨れ上つて其の上に波狀毛がぐしやぐし載つかつてゐる。口を結ぶミ、眉ミ眉の間にW型の烙印が出来て、弛緩した頬にNのギリシヤ文字型に溝渠が出来来る。そろそろ頭の頂點に禿が巢喰ひかけてはゐるが、先づ人種學上から言へばフライン・タイプの方で、瘦身長軀、さしづめ泥沼に落ちた瀕死の鶴ミ言つた鹽梅だ。ディッケンズは、十九世紀の小説家ミして赫然ミ輝やいてゐるが、猫庵君の輝くのは禿頭だけだ。嚙りくさしのけちなフランス語で飯を喰ふ大學のブロッツェサーで、間がな隙がな無駄口を叩いては、ぬらりくらりミ日を送つてゐる。

「甚を打つてゐた——やれく!」

雨軒居士、口惜しさ餘つて嘆息する。

「うつかり、本の方に氣を取られて此處でまご／＼してゐた僕よりも、朝つばちから甚なんか打つ君が悪いんだ。君の守に飛んだ訪問客があつて、いやはや、僕はごえらい目に逢はされたよ!」

「訪問客——はてね?」

猫庵君、首をひねる。

「はてねも糞も無い。マテイ・ルソウミ言ふフランス人さ。君の奥さんに引張り出されて通譯にまかり出るミ、彼曰くサ——」

ツシユウ猫庵「本日會見の約あり、然るに——」なんて、僕を捉へて不平のたらふくだ」

「やツ、成程、この間ルツウが手紙を寄越したので約束したのだが——エ、こ、今日は五月の二十日だったねえ、いやさうも……」猫庵君始めて恐縮する。

「あきれたね。君のぐうたら平にも——ルツウ君曰く『折角來たのだから暫時待たして貰ふ——』言ふのだ。ま、其れは其れでいいだがまさかフランスのお客様を、君の例の澁茶絡みの戦法を真似て、澁茶一杯で應接室の口の缺けた花瓶を睨まして置く理にもゆかないからな。おまけに奥さんの哀願にあつて、至方が無い、乗りかゝつた船だ。僕が到々相手役を引受けた——」

「フン」

「何しろ、ドイツ語と違つて、僕のフランス語は少々怪しい。

其れに加へて——」

雨軒居士、こゝで聲を落す。

「難問をぶつかかけられ、ぎゆうく、絞め上げられて、雨軒居士たるもの四十面下けて、大いにジャボの面目玉を踏み潰したよ」

「へえん——」

猫庵君は變な顔する。雨軒居士、更に語を續けて

「彼曰くサ『ムツシユ雨軒の名は承つてゐる、思ひがけなく此處で會見したのは光榮である』ミ。考へて見るさあの時に僕が名乗りを上げたのが一生の不覺だったよ」

「ルツウ君は、の事を知つてゐるのだ。其れに一度は是非逢ひたいと言つてゐた程だからね」

「こつちは甚だ迷惑した。こも角、ルツウ君は實に驚くべき日本通だよ。僕は若い頃、チャンバレンの源氏物語やアストンの日本文學史を讀んで、しやら臭いと思つたが、ルツウ君には驚いたね。近く何か書くミ言つてゐたよ」

「ウン書くだらう。何んでも其んな目的で日本へ來たのださか言つてゐたからね」

「材料仕込に、血眼になつてゐるさ見える。先づ第一質問が、

『日本演劇の源流は何か?』ミ來た——」

「フン」

「こいつなら、こつちから望んで説きたい所だ。で、僕はやつたね滔々ミ——先づ、演劇の根元的研究をするなら、一應能樂に眼を向けろ、更に其れより一歩進んで今度は支那劇の研究をしろ、ミ言つてやつた。僕は一寸驚いたね。其れはルツウ君は既に、支那劇に就いては話だけ聞いてゐる、ミ言ふのだ」

「ほう——」

「北京大學教授だった周文泉君の生前に、一度面接して話だけは聞いたミ言ふのだ。尤もルツウ君には支那劇の事は六ヶ敷く不可解だったミは白狀したがね。で、僕は要點をかい摘んで、支那劇、能樂、日本劇ミ其の關係を述べて聞かしてやつたよ」

「流石はジャボ雨軒居士だ、ルツウ君の著書に、君の名が組込まれるぜ岐度——いよく世界的雨軒居士だアね」

猫庵君が痛快けに笑ふミ、雨軒居士俄かに悄氣返る。

「ま、まつてくれ給え。未だ第二質問が有るんだ——」

「ムツシユ雨軒の、ご著作名を問ふ、ミ來ただらう」

「所が、お生憎様だ。彼の第二質問に曰く、センリユに就いて

のご高説非聴、ミ來た——」

「え、センリユ! 成程、成程、流石はルツウ君だねえ」

猫庵君、やたらに感心する。雨軒居士、いまくしさうに唇をひん曲けて

「ちよつ、いやに肩持つね。彼は鮮かに、實に鮮かにセンリユミ日本語を使つたよ、僕は始めセンリユミ聞いた。で、千兩——

てつきり千兩役者さいふ一名詞の事かと思つて、ねえ。所が違つてゐる——彼曰くサ。バシヨ、ブソン、チキつてね。僕の頭にびんミ來たのは俳句の事だ。——芭蕉、蕪村、千規、センリヨ? センリユ? センリユ! いや、川柳」

「おやく——」

猫庵君は奇聲をあける。

「察するに、ルソウ君は芭蕉なんかミ川柳をどつちやにしてゐるらしい。其れは向ふの勝手だが、兎に角この川柳の説明には僕は弱つたよ」

「怎う言つたかね？」

猫庵君、急に眼を光らす。

「さうもかうもない。諺曲なみに言へば、此の時雨軒居士ちつとも騒がず、ミ言ふ所だがさに非ずよ。其の時雨軒居士ぐつミ詰つたね。腦漿に鹽を振りかけて、絞り出したつて解らないものは解らない。あの時、僕は眼玉がぐらつてルソウ君の顔が白熊の様に見えた程だ。至方が無い、糞度胸を据えたよ。で、思浮ぶまゝに例の「居候三杯目にはそつミ出し」つてのを、平凡だミは思つたが、音吐則々ミ吟じ上げた——」

「フランス語でかね？」

「フランス語も糞もない。ジャボのセンリュだ、日本語でやつたよ。反覆四回にして、彼は此の句を暗記したがね。後で説明したが、彼はさうも解りかねるミ言ふのだ、尤も僕は小々ごま化したのだけさ——」

雨軒居士、此處で頭を搔く。

「へえ、其は残念だつたナ。僕がゐたらねえ」

猫庵君はしんから残念さうに言ふ。雨軒居士こゝぞミばかりに「残念なのは僕さ。ルソウ君の追窮には全く血の汗を流したよ彼曰く、センリュの本体は何か？ミ来るぢやないか。至方がないから「吾々の單なる趣味に非ず、吾々の生命なるゾ」ミ吹き飛ばした。尤も此れは君の卓論の受賣りだけさ——ルソウ君はぶつゝ何か口の中で言つたが僕には聞えなかつた。ジャボの器量を下げた事甚だしいが、後が怖い。で、猫庵大先生に詳しい事は問ふてくれ、ミ到々僕は尻尾を捲いて逃げたがね。君のおかけで今日は雨軒、散々な目に逢つたよ」

雨軒居士は、顔をしゃくり上げて口惜けに、咽喉をやけにゴリミ搔く。

「これは愉快だ、センリュに怨みが数々ござる、かねえ——」

猫庵君はハハ／＼面白さうに笑ふ。人の失策を痛快がるのは此の男の癖だ。

ルソウ君は、パリ大學の教授で、猫庵君が其の昔、文部省からの花聲留學生で滯佛中からの知合だ。頗る良い意味での野心家で、ジョンバリモスの「キモノ」ビエロロチの「お菊さん」インボン・レス・ト女史の「ユキさん」さては例のゴダム・バタフライ等等日本を縦横に見た是等の人に劣らぬ日本ものが書きたいミ言ふのだ。センリュなんて小生意氣な事を言ふのは、察するに猫庵君の小刀細工に相違ない。

フランス文學を唾ミ一緒に撒き散らして飯を喰ふ猫庵君が、柄にもなく川柳苦吟行者だから甚だ妙だ。猫庵君の川柳論には雨軒居士、從來大分に惱まされてゐる。鼻さへ突合はせば川柳講釋をやらねば胃が痛くなるさといふ頗る厄介な人間だ。其の癖素人目に見ても猫庵君の諺曲ミ川柳ミは、一人であんよが出来兼ねる程度のものでらしい。まだフランス語の方が少々はましかも知れぬ。

茄子もいでへたのいばらに指つかれ

或時、不埒な學生が慪ふ一句ひねつて先生ミ批評をミ來た。「これは面白いね」ミ、人の好い猫庵君、飯の種の音のボオル・モオラン論を「夜ひらく、夜ミさす」に洒落た積りか、これを逆に閉ぢてしまつて、大學の講堂で臨時川柳學講座を開き、長講實に二時間餘に亘つた程で、以來、口の悪い教授連、猫庵君の事を茄子仙人ミ呼んでゐる。

雨軒居士ミ猫庵君は、暇さへ有れば何つちかミ必ず押しかけて、風呂屋でしゃほんの泡にまつたの、妻が此頃大飯を喰ひ出したのミ、くだらぬ話ばかりしては時を經てゐる。だから時々かうして餘でもない事件がおつ始まるのだ。

「今日は午後一時から、外骨君の家で諺曲會があるよ。怎うだね。行つてみないかね」

猫庵君、センリュ事件で遭難した雨軒居士を慰勞するの意味らしい。

粒々集

「さうも行きかねるね」
雨軒居士、旋毛を曲ける。

「今日は日曜だからレオ子女史があるよ。其そに青森下りの林檎を喰はすさいふ事だがねえ」
猫庵君、頗る不良めいた事を言ふ。

「林檎で釣らうつて理だね。だが君等の謠曲會の連中の謠さきたら、側で聞いている氣分が悪くなる」
雨軒居士、すばりミ斯う振打ちにする。この時だ！

松山 前田 五健

神主へ渡るミ白紙生きてくる
土筆いま兵隊靴に無ざんなり
暢氣らしく見へますか研いでる
花の字が續く宣傳部の多忙

尖端語社長突然驚かせ
風船の彩ろにも春の流れやう

御影 長崎 柳

秀

ハイミ云ふここの云へない生れつき
胸算あのはらしなつた賞與金
ホネムーン甘へて呉れる船の揺れ
ご免なミ我が家へ洒落れる新世帶
道徳がごうのここのミ人のこ
つゞまりは今度も金か子の便り
死ぬ日まであてたミ醫者は眞面目なり
ゴ出勤窓の女の世辭を受け
我が年を書く宿帳へ目をつむり

東京 富士野鞍馬

「まッ、まッ、まッ！大變ですよ、あなた、早く来て下さいッ！」
突然、裏庭の方から猫庵君の妻君の聲が、オランダの風車の軋る様にキイ／＼ミ響いて来る。

「けえッ」

「何んだ！何んだ？」

謠曲所の騒ぎでない。猫庵君ミ雨軒居士は顔色變へて、椅子をでんぐり返して立上るミ、慌てミ内側の窓にヌツミ首を並べる

(つゞく)

姐さんの着替えになつた女振
汽車の窓裏場が見えて町になり
雨上り赤い鳥居が眼にしみる
しまつてたのに氣付く十二時
負將棋來客がありそれつきり

鬼怒川温泉にて (三)

翌日も呼んでくれミ温泉藝者去に
連込みは婦人雜誌で晝になり
温泉の湧き出るあたり宮が建ち

大連 大島 濤明

就職口奇蹟の如く一つ出来
具念ちミ僞りし日の神の前
健やかな手足に無爲な日が暮れる

濱寺 池澤 樂居

人世を盛る川柳の苦いこ
川柳の眼にミの罪も美しき
川柳の才小人生みやすし
川柳か作れて嫁が見つからず



或る角度から見た作家亂耽

出口 雨 町

嘗ては本誌の月評で佳句として決定的評價を受け、前月號に於いて又々山雨樓君から多大なる讃辭を浴びせられてゐる『煙突の下に眼ばかりうごめくよ』の作者亂耽君について、私は以下一つの觀察を下してみたいと思ふ。

×

茲にまづ明言せねばならぬことは、此の作家が決してイデオロギーからは句を作つてゐないことだ。即ち近代會に於ける一特色としての勞資鬭爭（廣い意味での階級鬭爭）を極めて局外的に視てゐるさういふことだ。従かつて『煙突の下に』の句に於いても君はこれによる何等の社會批判をも試みて居ない。作者の狙つた點はむしろ『眼ばかりうごめてゐる』さういふグロにあるのではないかと思ふ。

『たまむし』の石井潛流氏がこの句にさう毒づいてゐたかは、本誌以外の柳誌を讀まぬ私には分らぬが、しかし『これは即ち作者自身がイデオロギーの城廓に立つて主觀的に作つたのでは

ない（三月號の『柳味を探る』より）と見たのは全く正しい。もしそうでなかつたならば、さうして『モーターよ勞資いづれに味方する』なき言わうか。更に『合理化の刃が首の眞上なる』に於ける『よそ／＼しさ』はさうだ。實際工場整理に脅えつゝある勞働者や、少くも彼等の味方たるプロ作家なら、こゝもユーモラスには唄へない。要するに作家亂耽君は、そのウエートレスをうたひジャズや麻雀、讀み社會の上部構造に於るあらゆる尖端的なものに取材するがやうに、同じくルンペンを讀みだら幹をうたひそして勞資鬭爭の如き現代風景に素材を取るそこに君の新鮮な素材を求めて總まね眞摯な態度がうかゞはれる

×

さきに川柳雜誌社からの『君の好きな句を』との間に對じて私はまづ君の『煙突の下に』の句を答へておいた。あのイデオロギーを持たぬ純客觀川柳のさきに吾々が共鳴させられたのか？一般に現實そのものは何等の批判性をも持たない。けれども

それを受け取る吾々の眼は批判的である。亂耽君の作家的技術が素材即ち現實を作品の上に巧に生かしてゐるからこそ、鑑賞者は恰もありのまゝの現實に觸れたやうに興奮し感動され時にはアデテートもされるのだ。はつきりしたプロ、イデオロギーの立場から制作されたものでも、私の句なごはその効果に於いて遙かに君の作に及ばない。いわんや剣花坊流の無産派川柳においてをやである。既に周知の如く亂耽君はフォルマルズム文學論を奉じてをり、而してフォルマルズムは「イデオロギーからは絶對に文學は生れない」と言ふ。したがつて君がもしイデオロギーの牙城によつて主觀的な句を作つたすれば、それはむしろ不可解な現象と言はねばならぬ。

X

こゝに一人の漁夫ありて、素晴らしい海の入陽に見されてゐる。こゝに一人の時彼がまさしく詩人の境地にまで到達し得たにして、彼は決して詩人さと呼ばれない。彼はそれを繪に描き或ひは詩にする技術を知らないからだ。一般に作家が取扱ふ素材のよさはその詩藝の豊富さを物語り、形式の巧さは即ち作家的手腕を語る。さればその素材に於て常にフレッシュであり、形式技巧に於て特にユニークなものを持つ亂耽君の作品が、吾々に素早い内容を持つて迫るのは正に當然の歸結だ。以上、私も君に對する讃辭をさうも惜しみはしなかつた。だが私の別に言ひたかつたことは、君にはプロ作家としての色彩がミジンもな

いさふことだ。浪人街氏の句に「搾るさか取るさか晝寝知らぬこと」といふのがあるが、亂耽君の思想的過程はむしろこんな傾向に近くはないかと思ふ。

餘論

形式主義は文學に於けるプロレタリアイズムを駁撃してゐるにもかゝらず、その「形式か内容を規定し、素材と相俟つて内容を醸成する」ミナス點で極端な唯物思想（認識論上の唯物論）といふよりも、こゝでは史的唯物論の意）だと言はれてゐる一般的には私は形式主義を承認しつつも、これによつて總てを律するこゝに對してはいさゝか疑義を挾ざるを得ない。何故か？

拂はぬときめたぞ家主やつてこい
寝るだけに家一軒はもたない
ことりくと屍が引かれゆく
生きてゐることが氣兼ねなつて來た
ごうせもう二月は二十八日よ

ひろし
同 愚 龍
湖 舟
雅 幽

これらの句をフォルマルズムは如何に取扱ふうか。もし佳句として認めたすればこれをさう説明するか。更に技巧のない單純な露斗氏の如き作品が持つあの迫力をさう見るか。ミナス點から見て形式主義に導入されるに先き立ち今や一つの修正條件を待望してゐる言はねばならぬ。（三月九日）

光耀抄

葭乃選

大阪 房 子

ヒスの日も隅にはありて恙なく
乙女心に歸る豆の葉
花よりも團子ミ子等へ黄な粉ひく
別荘の櫻へ今日も醫者が来る
あられも無き話奥様また續け
バスガール客を落さぬ腕を張り
縫へミ出す此のほろびの蟲の良き
勿体なや母に炬燵を入れさせて
今宵逢ふしらせも嬉し電話なる
うつむいて炭ついで盥句はせる
小出櫓重先生を憶ふ
先生を偲ぶ團扇の祭の繪
手のひらにのせても見たい雀の子
坐るさへ狭いなりにも我家なる

大阪 壽 枝 女

通學へ母は白金懷爐貸し
酒の瓶おもしろいほぎ空いてゆき

釜ヶ池 可 都 惠

うつかりミ病院の名を書き添える
病院ももうあきくミ四年間
安靜の目は天井に向つてゐる
編物の腋へ懐温はさんでゐる

大阪 不 路 子

かたづいてお呉れ安心さしこくれ
年頃になればやつぱりもらひに來
結局は親の好みできめられる
云ひ分は有れさうるさしだまゐる

釜ヶ池 か つ 美

貰はれて行く妹の日に涙
妹ミ晴れて云ひえぬ悲しさよ
外出の人に療友たかつてゐる

(九頁より續く)

羽織を着、着物を着るこの區別を考へる場合何うしても川柳の方が六ヶしい、夫れにもかゝりはらず川柳の方が易しきされて世間から見られるところに川柳の踏みにじられた過去があるではなからうか否今日尙そうした状態におかれてゐる、恐らく簡單が一番六ヶしい。

『素』が一番六ヶしく水が一番お甘味しい様に、川柳の生命は六ヶしさに存する六ツかしく句を案ずるこき生命ある不朽の句が生れる。一人よがりの句は樂でもあらふその身輕、氣輕は好まし、こいたし裸體で道中してゐてうしろから笑はれてゐるこきに氣がつかずにある、おめでたさから斥いて見れば尻を振り／＼踊つてゐる己が姿は逆も眞面目に見られない。『力』ある一句はチツトやソツトでは生れぬ、川柳の大道は己すから拓ける年々己れ自らが此れをせばめて住んでゐるのが今日の柳界の大部分でなからふか。(了)

螢ケ池 あざみ

面會へ子供は先に走つて來
病院の廊下は廣う子は遊び
面會の夫へすまぬ子を負はせ

螢ケ池 美知子

公園の春のパン賣繁昌し
外出にちこ迷惑な今日の雨
お父さん跳子一つで満足し

螢ケ池 紅薦

病みつゝもさばり春を待ち兼ねる
桃割に結ふてみたいと病んでゐる
慰みに貰つた小鳥死んでゐる

魚崎 吟 女

長女洋書ならふ(二句)

遠くから見れば玉葱には見える
カンバスを持つに長女の小さ過ぎ

螢ケ池 伊勢子

アンテナの切れた今夜のつまらなさ
いなまつり今年も人形一つふえ

螢ケ池 伊都子

あの頃の面影もなく子が殖える
降り積んだ雪が悲しい雀の子

神戶 茂もよ

病床吟(二句)

水枕今日の頭に落ちつかず
時たまのぐちも寝てゐる身にふなし

京都 扇調子

四月月をいつそ素顔でゐたいなり
のんびり三羊隣き一つして

螢ケ池 浪路

犬の子へ朝の食事の箸をこめ
ステイームが^と夜は更けて行き

岐阜 卓 詠 女

麻雀の仲間へ父を誘ひ込み

○ 葎 乃

おみづこり子等は^は無事に來た
冷飯を喰べて來つらむバスガール

雀來よ來よきて伸びる屋根の草
春らしい襟かけずこも春が來た

(三十三頁より續く)

琴人——作者が果してお説の通り道學的な
氣持ちからこの句が生れたとならばお説の
通りに肯かれるが、人間の眞の美しい心持の
表れをそこに見たとしてこの句が生れたな
ら、美を認めて生れたのであるから道學的で
あると云ふことは私には受取れない。

町二——私も眞人間を人間本然の姿と取り
ました。結局この句の形式が反映する内容と
して、人間の精神なんて當てにならない。在
るものは現實だけだと云ふ、氏の生活認識を
詠つたものとして共鳴したので、道學的臭ひ
がするとすれば私も亦頂きかねます。

紋太——僕の解し方が悪いのかも知れない
しかしこの句も誤られ易い。叙法を行つたと
云つたと云へると思ふ。道學的感じと云つて
も作者は無意識にそれ等を構へないで表は
してゐるあとが認められるので僕は僕の解
し方であつても頂ける句だと思つてゐるの
です。

琴人——私は句評の六ヶ敷さに付て文字の
上に表れたものだけを以つて批評するのと
その句が持つある零圍氣、さうしたものを作
者の境地に迄及ぼして句を批評する事が最
も親切な評の仕方であると云ふことを聞か
された事がある。さう云ふ意味で私にはこの
句を道學的と見る事の出来ない理由でもあ
ります。

町二——要は眞人間の解釋如何でありませ
う。私は「眞人間」は作者自身と思つても差支
ないと思ひました。



一路集

(募集句)

髮

前田雀郎選

裸人 鯉友 町二 珊瑚樓 洋一 沙門 紫石 摩耶火 艸樂 紅山 暢水 錦水 新水 南路 天鬼 無路 喜代志

口へピンくわえて側の子を叱り
久振り髪を洗へば不意の客
梳き油はつきり闇をすれ違ひ
結び立ての髪は亭主を直ぐ使ひ
その髪に人妻さ云ふ顔で来る
洋髪嫌ひな母さ二人住み
大丸鬚挑戦してるかの如く
いつまでもおさけが養父氣に入ら
鬚の根を搔く齒痒言ひ負けず
憎らしい髪が障子に動いてる
梳き髪で見ればかくせぬ敷が
おし鳥を結ねせた日な母も惚れ
差し向ひ髪を匂ひに只黙り
同じ髪結ふて踊り子派出に見え
束髪でいぢやないか男親
二日目の島田は元の首になり
喜びへ老婆蠶豆程に結び
洗髪さわつて見たい黒さなり

髮結ふたさへ夫が歸つて來
挨拶がすむ互ひに髪をほめ
口入屋昨日の髪をまゝで來る
説明を聞いて勅題髪を知り
髮結へば娘行つたり來たりする
惡友は福白毛たまさかめてくれ
白髪なご抜かせて母はいゝ姑
剃髪の當座俗縁きてくれる
心持ち程を伸ばして退營者
桃割がバスにあんまり揺ります
死んだ娘はよつほさ長い黒い髪
忠臣の白髮歸參の叶ふた日
結立ての女房着物をすねても見
飛びさうに髪をひろげ湯屋を出
自然に太い髮櫛の齒も尖つてゐ

秀

添ひ逢けて女の髪をあかく見る
いゝ髪を貰はれてゐる内氣な娘

龜坊 憲坊 白摺子 世紀 素月 明珠 有爲郎 千雨 棹二 吐句坊 方眠 没食子 將吉郎 吉絃堂 同 昌城 長二郎

續川柳家の戸籍調

係 山雨樓

◎ (一)姓名 (二)雅號及別號 (三)出生地 (四)現住所 (五)生年月日 (六)職業又は勤務先 (七)好きな句 (八)自信の句 (九)川柳以外の趣味 (一〇)配偶者及子供の有無 (一一)嫌ひなもの (一二)川柳に手を染めた年月

(280)

長崎 柳秀

(一)長崎仙太郎 (二)柳秀 (三)大阪市南區島之内 (四)兵庫縣武庫郡御影町字榎本 (電御影二六八九番) 五明治十二年八月八日 (六)教授大阪醫科大學 (藥物專攻) (七)澤山あつて書けません (八)心中へ明日のお立ちを聞きに來る。欺す氣と惚れてる氣とが差し向ひ。ひと寝入しても起きてる針仕事(書け)とならまだ。數々あります。呵々(九)撞球、浪花節、英雄の傳記、映畫、喜劇(一〇)有り子供二名共に男(一一)みつともむない洋装、きのさかめ愛嬌のない女、まじめくさつた人、みてくれの悪いたべもの、眞面目にやらぬ人 (一二)大正十四年春頃?

(281)

廣島 笑人

(一)廣島三郎 (二)笑人(近時別號を使用せず) (三)神戸市 (四)岡山市南方三六六 (五)明治三十年八月五日 (六)日本銀行岡山支店勤務 (七)骸骨のどこに小町の花の色(劍花坊)、ピルビル秋が來たと秋が來たと(路郎) (其他澤山あり) (八)偽りの中に心の色を變へ

吾髪の鏡の前にいくじなし
束ね髪男女を疑はず
洗髪思ひ出せないまゝに濟み
今桃水

指

指先に染んだインクの懐しく
さけの指父が代つて押へつけ
女湯へ石鹼渡す太い指
節太い指が氣になる女事務
指だこのしつかり蹴を握りしめ
お粗末な指へ嵌つた二萬圓
指のきす口一バイに子は入れる
手袋をはかない指に光る石
解らない文字が浮んだ指の先
指絞見る女給の手あすけいる
乗りさうな客へ圓タク指を立て
指さ指はづみの觸れだ黙殺し
點字讀む指の動きを不思議かり
家政婦の指あちこちの水を吸ひ
指五本揃つて居るか産婦云ひ
指切をした一方が泣いてゐる
令嬢の指に小鳥が餌を求め
指の觸りにも戦きし戀なりき
白魚の指握るカクテラグラスよ
フト見たる世帯疲れの指のしわ
ピアニス指を見てゐる物思ひ
取引所指一本の眞剣さ
負けて駒持つ指のふるい出し
指切をチャンミ知つてゐる女の子

拓二 伊山 三期 湖山 雪峯 千春 練屋丁 蛙鼓 裸人 繁坊 利郎 民郎 桂舟 泉 耕民 三汀 ぎさん 不明 有爲 然 進一郎

(人) 栴卷で朝から狎を抱き歩き
(地) 後添ひの意地にも見束ね髪
(天) 喜ば母は日髪もまぜて結び
勝光靈 二路壺

太田朝陽選

指先でアメリカのニュースきく
干支を繰る指にも母の嬉しさが
人間の十大慾を指に折り
ペンシ筆指の鈍さを齒痒ゆがり
寛いだ指に煙管のよくまわり
指先のほんささばいた札勘定
引金を引く指ださば信じれず
お便所に黙々坊の指の穴
ねえ貴耶さ指のきすは持つても
指先に熱い玉子の皮をむき
不覺にも新妻指を少し切り
袂くそつめて少さい指の股
譯もなく呉れる指輪に氣がつく
指先で話もできる俺であり
中年の三味の稽古や指硬く
こぼれたる御飯が足の指の股
美しい指に唇嚙らせて居
照筆は指に力を入れて書き
定牌に力をこめる指の先
寒行の指先が凍えて來
指ざわり百圓札のあつてな
指の股より涙潜々こ漏れ
小指無い右手女に尋ねられ
指の線筋るまゝの生活苦
沐木明方利不愛路
天馬晴眠子生緒子

圓角 新水 靈壺 青友 千帆 巧笑 奇可愛 將吉郎 天絲 卯三 水馬 涼哉 詩郎 普天 浸食子 愛緒 不路子 利生 方眠 明子 木馬 沐天

(初期の作ですが何だか今でも捨て切れない
で居ます)(九)野跡、謡曲、長唄、將棋、觀
劇、其他演藝に關するもの一切(一〇)妻あ
り時々駄句つて居ます、子供は男二人(一一)
無責任な人(一二)大正十三年頃だと思つて
居ます。

(1926)

釜永睡花

(一)釜永光治(二)睡花の外なし(三)岡山市
内山下(四)神戸市久保町五丁目六七(五)明
治三十五年一月八日(六)職もなければ働ら
かす(七)賣上の音に乞食が立つてゐた。教太、
豆腐屋へ女眞直立つてふる、九葉(八)發表句
皆自信あれど、酒の酔ひプロレタリアと名乗
たし醫者を出て低いツバメとすれちがひ。
飴うりの裝束おかし旅ごころ(九)芝居、旅
行、三味をきく(一〇)なし(一一)隙のない人
と電車(一二)大正十一年夏「柳太刀」の青明
忌に初めて出席

(1926)

木村晃卓

(一)木村雄賀(二)晃卓、多真助(三)愛媛縣東
字知郡高山村(四)別府市下野口(五)明治三
十三年四月十五日(六)株式會社商運社別
府出張所(七)澤山ありますが常に頭へこび
り付いて離れない句に路郎師の「秋さらり銀
の襖のもの思ひ」欣女」とうきびを岐阜提灯
の下で食べ「雨町」何をかくさん血の色は赤
(八)自信の句なごあらう答がありませぬ雨
杭の竿ふく女房の手から晴れ割引付で無難
な句だと思つて居ます(九)盆裁(一〇)妻あ
り子なし(一一)おしやべりと見得坊(一二)

子實を問へば四本の指が出る帳場にて指はモダンの想を書き惚れてゐる弱き指を見つめて踊る指タイブライターの面白しシヤッターへ指の力がはいり父の爲賣つて我が指淋しく見單調な單調な指の勤めよ實印を押す指先に力ありふみ煙草吸つペンダゴの指を見る今度きた丁稚が強い指角力觸診の指下腹でてれるなり指の細さが都會へ飛び出させ太い指田舎に居てた事が知れ指で輪をつくつてボロイ話し親指で課長來社を告げてやり電信機唯指ばかり動いてる失業の指の節なき考へてず案内の指に驚異の眼が續き霜の夜をしみる母の指を見る挨拂の指を見てゐるお客なり指の節高いが丈の自慢なりさけ緒を繰に緩む指を折りな指みんなんひろけて小供嬉しがリシツペイへまだ指の形のなつ新妻は玄關に出て指をつきハンマ持つ此の指に尊い豆が出來指指指あゝ思出の寂しさよタイビスト指先だけの命なり指病んで妻に仕事を手傳はせ

暢山 雄花坊 志太郎 茂郎 良雪郎 夢裡 宏郎 三碧 吐句坊 盧白 八歩 龜坊 喜由 武坊 かすま 日々城 泉流 末乘 水煙 柳次 葉光 勝二 伊熟子 操 杜子 谷師

約束へ指きりをして別れけり其の指へ一家五人の無事な顔かれんたる孝女は太き指を持ちフト見たる世帯疲れの指のしわほきりほきりご指をなげ雨の音失業に指動かしてたしかめる指先を淋しく見てゐる病上り染物屋指の先まで染めて居る指を見て父の苦勞を深く知りポケットの金指先で勘定し太いのが細いのを追ふカルタ會戀人の温りがある指をなぜ迷心の蛇に指差す子を吐り白魚の指に握るカクテル友で大三十日残りの掛へ指を折りくつゝを笑ふ障子に指が出るウマゝを指でおしへる凡三年風糸のもつれに母も指をかし涙金指一本に軟化する觸らせて痛がつてゐる指の疵親指ご子指は外に役を持ち

紅葛 長二郎 可都恵 同 奈緒美 四五磨 竹水 錦水 まさる 掉二 珊瑚樓 魚郎 同 菊路 新柳 市松 紅 白化子 素月 おさむ

佳作

節高の指たのもしく妻の見る大寒さはつきり女中指に見せ思案する指は齒痛ヘット觸り上品な指に靜かや琴の音指先が微かに動く齧末魔空いた手が手傳ひさうな指角力幸福の絶頂にある白い指

松枝 憲坊 司郎 山月 樹光 樓果 明珠

明治三十八年七月…中斷…昭和の初め(とて
もあがらぬ風です)

(2034)

實川 二葉

(一)實川伊一(二)井々洞、二葉(三)島之内(成年まで京都で育つ)(四)現在は東成區中道町二六(八其内變ります)(五)卅六年三月拾三日(六)化粧品店(七)逢ひたうて來たとは女云はぬなり(八)紋付のうしろの姿も父に似て(九)宿替、競首著、將棋、書其他手當り次第ですが川柳以外は直ぐにあきます(一〇)お世話下され度し(一一)甘いもの、(一二)もう八九年になりませう

(2035)

櫻井 圓角

(一)櫻井如一(二)圓角(三)岡山縣津山(四)大阪市東區農人橋貳丁目二六(五)明治廿四年七月十八日(六)デンチスト(七)人妻も折々夢は見るものぞ(八)一徹)寢返りに甚盤四角に構えたり(路郎)(八)たんぼを吹けば心配飛んでゆき(九)テニス(一〇)あり四人(一一)赤眼、小言、係争、執拗(一二)昭和二年九月

社告

第二回懸賞川柳「靴下」の選句を本號で發表致すべき處主幹の病氣のため遺憾ながら五月號に發表を延期することになりました。

三月廿二日

川柳雜誌社

子の指につまゝれた蛙の悲鳴よ
ヒヤットする間に指が切れても
失業の指の白さを笑はれる
洋々 世紀 太路

秀逸

指二本額に見せて酔はぬなり
挨拶の響へかくる派手な指
指を鳴らして朝の口笛
氣安さは指でつまんだ鮮の味
出来たかき指先ふれる酒の爛
けつまづく小指へ私の愚かさよ
想ひ出は指に残りしローマンス
吉絃堂 紫石 町二 英賀夫 松好齋 村樂 枝

現金

◇雨町選
ビールまで添え待つて給料日
金貨鳴らして守銭奴の耳老い
評 齢とりて尙官能の衰へさるはむしろ悲慘に近し。

現金に決めてゐつゝも貸し出来
給料日會社へ金をごりに来る
藥價現金仁術があきれたらあ
評 いふまでもなく「如何にナルジョアに奉仕すべきか」が現代醫學を築かした。

現金は疑ふやうに數へだし
現金へ手をふれてもふころ手
電車賃貴つて今日もあてがなし
評 反動内閣の政策當を得ず、求めて與へられず叩けごも開かれぬ。市場價值なきこの双腕を如何にせん。

(人)指で字を問ふ受附の砂埃り
(地)菓子を買ふ子の指のまじり
(天)吸へ吸へ指から乳も出る坊
(軸)六感で働く速記者の指先
選後に——澤山の挨拶中半數以上は指輪、指紋の指に連絡なき句、親指小指を人に見立てた句に類句多く感心しませんでした。新水、素月、山月、樹光、世紀、太路、英賀夫、村樂、桂枝、艸樂諸兄選句外に佳句が澤山拜見しました、何かの折に發表させていただきます。

安出口雨三町共選

現金を替る質草重たすぎ
得心をさせて現金渡すなり
評 原句には「渡して」とあり。比較研究を乞ふ。
まだ値切る妻へだまて金を出し
マスターは現金主義を恐れ入り
現金もあり氣量もよいこくる
評 因習結婚に於ける仲人へ浴びせた一つの皮肉と見て面白し。
商賣を現金なごは何を言ふ
買つてやる言急に動きだし
口惜しさへ叩きつきたい金かき
飲めるに聞く先頭に立つ
評 まことに愛すべき男なるかな。
現金のきけばわたしの氣性です
借りは借り今日は銀貨の音飲
現金をにぎつてからの相談さ
耕民 利生 紫石 千春 天柳 進一郎 不路子 勝二 魔耶火 日日城 有爲郎 二册

創作

川柳版畫

名句が活字になる喜びも喜び、それが版畫になれば一層樂みでせう。句を愛する柳人の句集に、又は座右にそして名句額布等に至極好適です。一句御注文の節にもなるべく句數を多く一句毎に句の本慧をお書添へ下されば、何圖でも柳界發展標榜の元に迅速慎重に製作し、皆様の御愛顧を期してゐます。

要規

版畫……木版畫
大さ……葉書大
色紙……黒以外の一度刷
用紙……厚手高級の和紙
價 格

彫り……一枚……十錢
(出来上り一枚つき)

増刷……一枚……三錢
(何枚でも應ず)

送料……二錢
(五枚以上は送料不要)

製作者 京都嵯峨天龍 前 田 中 相 界

評 然り。如何に精巧な機關車といへども石炭なくしては動き得ず。

(人) 現金な世の中金へべこく。方 眠

佳 お金でも落ちて居る大晦日 英智夫

評 冗談にしてはあまりにも真剣な冗談である。笑へない。

(佳) 現金で呑み惜しい顔なじみ 雪 峰

(同) 金で買ひつけた耳をそろそ 櫻 果

評 無理とは知りつゝも催促に催促を重ねし金員今日ばかりも調達さる。金主にして又一片の良心なきにしもあらず。十二月某日の一スナツプである。

(佳) いつそもう現金による産祝ひ 裸 人

(同) 現金のやですがごもみ手 まさる

(同) 新妻へ袋のまゝの金を出し 黒天子

評 社にありては上役に忠實に、家にありては妻に忠實に、近時カフエのコーヒをなめしこと断じてなし。あゝ尊くも凡なる哉。

(佳) 今賣つた鎧がゆれてゐる 櫻 果

評 輕妙なよい寫生句である。

(佳) 現金に見された顔をあげば 民 郎

評 古川柳に「百兩をほごけば人をしきらせる」があり、黄金の魅惑今も昔に異ならず。

(佳) 珍客が突然金を借せよ云ふ 松 枝

(同) 現金をつんでつまらぬ納課 水 馬

評 こゝにサラリーマンのちつぽけな不平あり。こゝにサラリーマンのちつ

ぽけな満足あり。

(人) まけさそ来主人金を出し 四五磨

(人) 現金で拂ふ強の飲みつぶり 泉 流

評 原句には「飲つ振り」とあるも發音に忠實なるを可とす。

(人) 現金を出せばさ變つて來 太 路

評 俗に云ふ「地獄の里も金次第」とか、人にこの心理なくんば上層の君子に豈潰職、收賄の沙汰あらんや。

(地) 現金が合わず傳票散つて 山 月

評 原句には「散つて居り」とありしも、少しきつ過ぎる懸念なきや？

(地) 現金へ律氣すぎるこ此ら 光 路

評 「律氣」は「律儀」の誤りならん。

(天) 現金へ薄氣味を連れが出來 勝 二

評 何處からか妾現金出して來る 利 選

炬燵から金あつたらの相場欄 有爲郎

現金で買ふよご財布の重い音 竹 水

現金で願つてますにべもなく 菊 路

現金に換へるだけです整理品 魚 郎

現金と通帳合はないまゝ寝る 没食子

現金な話だんく聲が落ち 進一郎

大金庫現金わづか入つて 明 晴

現金をにがい顔して父は出し 可都恵

現金を老婆なんだか危ぶがり 素 月

現金で買へば結局負けてくれ 不路子

現金でこれだけならさ前にだし 愛 緒

現金を受付念を押して出し 今 雨



現金で買へば損した氣持なり
金利なき云ふて現金で賣て居る
シスコから現金を擡つて戻つて來
現金の來るまで淋し宿に居る
現金で呉れまはあまり冷淡な
現金の魅力幹事は丸められ
現金を見ぬうちいつかな手放
現金に替へて約手のホツとする
口惜しさへ叩きつきたい金が
現金を擡り質屋を寒う出る
現金のかさへ我身のみすほらし
かさく現金係去勢され
現金をにぎつてからの相談さ
現金で買へば福引ついて來る
現金を替へる質草重たすぎ
現金も見へる質草重たすぎ
一錢の音にも人の目は動き
得心をさせて現金渡しして
現金で拂へばすぐに持つてくる
現金で買へばお世辭にまけて
金持てば又悪友が一人増え
現金をそえて私生兒もらわれる
現金に光る拘摸の眼刑事の眼
現金をつきつけられて口説か
紙屑屑案外現金持つてゐる
解決に現金ありさ高く居る
一錢のお客大きな聲で來る
現金にはつきたこも言へ居る
現金は五分引き云ふれをはり

三 碧 方 眠 普 天 千 春 雪 峰 哲 郎 艸 樂 青 水 勝 二 康 夫 黑 天 子 圓 角 二 明 榮 壽 坊 耕 民 太 路 英 賀 夫 利 生 ス エ ノ 谷 郎 長 二 郎 裸 人 泉 流 八 步 木 馬 盧 白 紅 山 卯 三

現金が合はず傳票散つて居る
金が出来れば死ぬる心配
減相な金が出来たら又おいで
現金日本人の顔になり
突然で今日はそんなに持つて居る

佳 調

應揚に懐叩いて引受ける
現金を前に職人ねぎられる
こほけ顔あれでたんまり握つる
貧しくも借らぬを主義に日を送り
つり出せば冷めたい客の手が暖
一錢を握り息せき切つて來る
現金は疑ふように數へ出し
珍客が突然金を貸せ云ふ
まだ値切る妻へだまて金を出し
現金は夫婦が別にしまふなり
現金の音に巡査が立ちごまり

秀 調

現金を見せで商戰巧なり
現金で買ふのに亭主氣が弱い
現金の前のおにぎりをさけすめず
現金を中にきれいな押問答
現金な揉手さ知つて煩笑めず
電車賃貰つて今日もあてがなし
金貨鳴る守錢奴の耳ちツツなり
(人)現金五千圓なりチツツなり
(地)突きかへす現金散らばらば
(天)遊ぶ金先祖を變て杉を伐り

山 月 奈 緒 美 不 然 日 日 城 夢 裡 沙 門 喜 代 志 靈 壺 桂 枝 櫻 果 蛙 鼓 ぎ ざ ん 松 枝 紫 石 新 水 明 珠 多 郎 沐 天 水 馬 光 路 磨 耶 火 正 義 町 二 喜 由 光 路 町 二

支部の聲

神戸支部便り

幹事 日野華水報

◇永年神戸柳界の爲當支部幹事として盡された楊井二南氏が今回都合に依り大阪へ轉居される事になりました。

◇新幹事として小生が今後の當支部を引受ける事になりました。微力乍ら熱こ汗さ力を以て努力する覺悟です。皆様の御後援を御願ひ申します。

◇曾て大満支部で活躍された谷内端弘氏が神戸に轉居。當支部に於て御盡力下さる事になりました。

◇野口碎月氏は永く病床に居られます。才幹ある君として未だ柳界に活躍出来ないのは遺憾です。全快の上作句に邁進される日を待つて居ります。

◇今後支部同人の名稱を改めて部友と致します。

三月號の正誤

十四頁

犬が根元をはつて梅の咲く省二九頁の左の數句は松盛琴人氏の吟です。死ぬもよしフツト考ふ眠り際

千日前雜觀(二句)

猿芝居そつばを向いた愁峰場藪人を連れ千日で揉まれてる

五頁

口あいてゐるのがまこになり

KISSの唇が河豚に見へます

口紅を袖でかくして棚で泣き
花びらの様に寶塚口をあき
口紅もつけずすなはなあかさなり
ウエトレス口紅あせて支拂日
口紅のついた敷島見せ歩き
口紅の思案に障子明る過ぎ
厚い影から口紅が光る夢くぐち
女學校出ていつの間や口の紅
お茶碗に口紅つけて飯はすみ
口紅に欺されてゐて面白し
競馬場その口紅のいゝ度胸
春宵をその口紅に魅惑され
(佳)ものうも口紅ばかり光つて
(佳)口紅へ男瞞されそうにある
(佳)泥酔の目に口紅の顔ばかり
(佳)花朧る口紅の群鹿の群
(佳)幸福なもの口紅とく薬指
(佳)綱れ切る惱み口紅さして春
(佳)紅唇が覺物にみえし牧師様
(佳)墮ちて行くばかり口紅の濃さ
(佳)口紅へ今宵の嘘を考へる
(佳)塗り直してもうキッス忘て居
(佳)口紅の思ひ出よ女肺で死に
(軸)をろかろ口紅だつた事を知り
席題 不 平 ひろ

奇可愛 竹水 不路子 南陽 白柳子 二南 愚陀 素月 一久 無鬼 清魚 同魚 路郎 柳甫 主税 夢裡 柳次 清魚 狂雨 柳影 三碧 愛緒 琴人 不路子 夕鐘 南陽 機見女 泉流

年頃の不平は育を向けるなり
不平滿々として尖る神經
不平滿々父も息子も寝てしま
地下室の隅まで不平ゆきわた
不平なら聞き飽いて強支觸人
妹の不平ビロに強く觸れ
不平の靴が小砂利嚙まざる
不平の靴が小砂利嚙まざる
こげ飯を半分食つてふいと出
姉妹の不平に大鉢消えてゐる
不平をば妻なればこそ聞いて居
女房は不平と別に膳を出す
慰める妻も不平をちと感
別荘へ不平のピラが散つて來
雨もりへ家賃下げない事も云
不平言ふ口からバツトこり落ち
不平をば押へて苦い酒を受け
同僚の不平便所の中で聞き
遊んで不平ばかりを言ふ男
不平をば誇張して居る爭議團
不平兒へ正直な母うるくと
彼女の靴の不平は期らか
無理のない不平は赤い顔になり
不平を持てば熱い風呂なり
苦々しがればそれからよりつかず
不平を抱いて自動車に飛ばされる
ボケッへ不平を捨てに來る朝
赤い灯へかなぐり捨てに來る不
つゝましく坐つて女房不平あり
清廉な男不平の渦にある
訓示には大きな不平持てと言ひ

情介 卯三 裸人 豆秋 いわな 主税 柳影 琴壺 靈壺 二南 英郎 水車 白柳子 沐馬 木馬 柳甫 素月 無鬼 虹人 裸人 奇可愛 愚陀 かほる 同路 同雨 同狂 同哲 同紀

不平言ふ氣力も失せて金をため
不平のツバあびつストロウ黙つ
會社での不平道頓堀へ撒き
席題 誕生 互
親一人子一人今日の赤御飯
子を叱りふと誕生日思ひ出し
誕生日牧師にカード贈られる
會社へうれしい知らせは男の子
誕生へ妹が湯を沸かしに來
待ちかねてゐたに女の子が生
出産は間近亭主は外へ出る
誕生へたうるだる父であり
誕生の子を計つてるキログラム
誕生へ靴を揃へて歸つてゐ
勤から歸れば出來た聲があり
死んだ子の誕生日だけ覚えてゐ
からかつてくれるな今日は誕生日
誕生を外で祝うた二階借
川柳雜社 川柳ユーモア會
神戶支部 二月四日 於八宮神社楠町事務所
兼題 小 唄 二 南 選

同 碧 同 選 南 洋 夢裡 世紀 竹水 豆秋 柳影 鶴峯 清魚 哲郎 白柳子 柳次 同 宏 同 朗 同 選 竹風 桃水 鬼笑太 嶺月 素生 靖弘 東洋鬼

御旅支部例會 (大阪)

三月一日

於逢阪若葉
櫻井圓角報

折よく來阪された素人師の聲咳に接するを得興の盡るを知らず一刻千金の宵を過した。

兼題 春 雨

路 路

素人

女房へあくびのうつ 春の雨 素人

落ちてゆく都は今や春の雨 素人

春の雨同じ心に降りかゝり 素人

春雨は偲べ偲べと降つてゐる 素人

出無精がフイと出て行く春の雨 素人

ヘッドライト紫色にほけて春雨が 素人

溶けそうな春雨の夜の貸座敷 素人

春雨の波紋も描かず川に融け 素人

女の甲高さもなくて春雨よ 素人

春雨に土筆の袴の土もよし 素人

丸髻の埃りもとれて春雨よ 素人

春雨に濡れて玩具のあはれなる 素人

うなじつめたき春雨の戀 素人

雨だれのタチは 春のもの 素人

(人) 雨の日に遇ふ小娘春の顔 素人

(地) 春雨の惱ましき傘につゞゆく 素人

(天) 雨の脚春が踊つてゐるなり 素人

(軸) 春の雨きけばなんは丸抱え 素人

兼題 幻

路 路

素人

幻なのがれ 瀧の上 素人

幻に小鳥となつて呼びに来る 素人

壁のしみ天井の節寝付かれず 素人

浮世をば幻と見て輕業師 素人

死れとばかりにつきまとう幻影 素人

抱きつけばその幻は金であり 素人

はげた壁見つめて居ればすきな顔 素人

(人) 幻に見た娘の姿春はよし 素人

(地) 箱根を越えて別なまぼろし 素人

(天) 六感が働くと云ふ惚れたたき 素人

(軸) 幻へ平蜘蛛の如くあやまつた 素人

(同) 何處から風が来るや青部屋 素人

兼題 心 配

路 路

素人

たんぽぽを吹けば心配飛んでゆき 素人

心配はお金が脊負つて行ちやつた 素人

心配の嵩を計つて渡したい 素人

心配は頻で銚子を數へたれり 素人

心配へお世辭一々叱られる 素人

兼題 通 帳

路 路

素人

質屋の通帳を見せる藝妓 素人

通帳見れば飯なご食はれない 素人

通帳のきく問だけ俺の命だ 素人

通帳の總決算も出来て春 素人

行李の底はさびしからずや通帳 素人

預金帳預けたのみを考へて 素人

通帳頼り少さい字がならび 素人

通帳頼り少さい字が見て歸り 素人

通帳頼り少さい字が見て歸り 素人

通帳頼り少さい字が見て歸り 素人

みつる

多 夢

素 人

多 夢

路 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

洗粉の指にざらつくものがあり 素人

この通り色が變ると香具師の髯 素人

混ざり氣のない心だけ買つてくれ 素人

混ざり物のない血の型でけりつき 素人

大學出混ぜものをする才はなし 素人

混ざり氣のない一點で相通じ 素人

(人) 混ざり氣の江戶ッ子の江戸をさ 素人

(地) 混ぜものをせよと主人云はぬ 素人

(天) 混ぜものをせよと主人云はぬ 素人

(軸) 混ぜものをせよと主人云はぬ 素人

兼題 洗 髮

路 路

素人

丸髻に結はせた人を驛に待ち 素人

後毛もなまめく春となりけり 素人

結び立ての風にも注意して戻り 素人

春雨へ三越までの髪を結び 素人

取次のしとやかに出る髪の出來 素人

髪を結ふ妻を大きな聲でよび 素人

忙しい中へ結びたてもどつて來 素人

考へつかぬ机へ髪が抜け 素人

洗ひ髪ダラリと垂きしやべりに來 素人

黒髪に冷やと心臓撫ぜられる 素人

兼題 約 束

路 路

素人

約束はしたがあしたに迫る金 素人

金の要る約束の早や櫻咲き 素人

約束の約束一度念を押す煙管 素人

素 人

多 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

同 夢

川柳 兼題 天王寺支部會 (大阪)
雜誌社 於 內藤製作所
三月十一日 須崎豆秋報

腹空かめ若きに春を飽いてくる
腹の深さへたくらみし復讐

空腹を抱えて今日も職は無く

重役の腹に一物ある笑ひ
あけすけに云ふて腹を見透か

身持腹連れて發車の間にあわす
満腹の時を知らない檻の猿

腹いせに云ふは云たが氣にかゝり
腹立てふくふみたがはじまらず

(佳)しくじつ腹へ蜜柑が恨めしい
(同)腹痛へ母が情けの風呂に行き

(同)空腹のやつぱり家で喰ふとも
席題 客

客に出す座布團もなし一人者
珍 客へ姉も氣忙し臺所

なじみ客目と目であいづされて
恥しい客へ紅茶を運ばされ

伯母さんへ小さなお客俤張つて
來つける客娘のむなさわき

來客へ一人ぼつちで困りはて
特賣へまだ買ひ足らぬ客の顔

遠來の客へボナスふいになり
まゝ事の客は支度の出來て

來客がある日曜を起され
珍客は子供の歳まで聞いて

俺の客へ母の饒舌りすぎ
此頃は熱が有るのに嫌な客

來客へ猫長々と伸びてゐる
夜の客月のことなど云ふて立ち

杜 洋
同 紅 玉

沙 門

吳 柳

道 喚

津 浪

伊 勢 子

町 子

勝 美

紅 花

靜 二

禮 選

美 和 子

石 松 子

長 江

紅 玉

愚 龍

伊 勢 子

喜 久 兒

百 萬 石

吳 柳

杜 洋

六 華

道 人

同 康 夫

珍客へつきめ話を食事にし
幼な子は客のみやげに目をつける

お歸りの客へ紅葉の手もお挨拶
遠慮する客の水は水になり

川柳加古川支部例會(兵庫)
維誌社

一月二十日 水田篤男報

席題 旗

ハタタコはもう壁にまで落書きし
旗持は此世も捨てた顔で行き

不規律な國旗もうれし村の春
國境に日の丸高く雪模様

大さように亭主を呼んで旗を出し
夜遊びの主人黙つて旗を出し

新妻の折目のついた旗を出し
旗の涙もまれもまれて母の顔

席題 寒 行

寒行と云つて一切火によらず
寒行にちと暖かい日が続き

寒行がよめつて見へる暖かけ
寒行へこたつから出て聲をかけ

笑はれもせず寒行を見て通り
寒行に乳の足りない子が起きる

寒行の去る足音も冬のもの
寒行の功を経たのが高足駄

寒行の太鼓が憎い妻の留守
二月五日

席題 とぼけ

とぼけてる様で抜け目の無い男
不利益になればとぼけるを知り

とぼけ面したの香具師は見逃さず
同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

寢とぼけた顔へ土産がぶら下り
食乏の親は子供にとぼけがち

私服そのとぼけにのらず速き行き
人氣者とぼけた顔で笑はせる

長命の日南に丸くとぼけてゐ
二月三十日

席題 火 事

彌次馬へちと物足らず消へかゝり
すりばんが止む頃たるむ腹の皮

ポンプより彌次連中が先に行き
腕章の消防酒が物足らず

氣がふれた様な火元のおかみさん
よい男今日の火事に役立たず

火事騒ぎ悟つたらしい事を云ひ
火事毎に説教される火の始末

火事場から戻ると子供が起きて
火事跡に踏みこじらる八ツ手の葉

あかゝと火事のんきな顔が浮き
席題 女 給

泣いてゐた女給は眉を引きにゆき
今夜も自暴にのみたいウエトレス

今日又コヒ窓りとこぼして
ラブレター女給は好きな客に見せ

女給なんぞと思ふ掩も馬鹿だつた
幻滅の悲哀を朝の女給に見

女給まづ笑顔を放てから座り
三月一日

席題 梯

雀とる梯子のすそへ暮れてゆき
はらゝと梯子の下が目乾き

上り行く程梯子に力いり
同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

席題 思 案 白

洋 選

寒い風思案にあまる白い息

南 陽

又今日も彼の女の智恵を借りに出る

同 星

思案する膝で小猫はよく眠り

笑 明

産制を相談に来る思案顔

柳 路

何思案するともなしに駱駝立ち

同 登美坊

思案つき猫板の女將ふいに立ち

同 登美坊

寝煙草の顔を枕に思案する

六 角

惱しく思案の處女へ花が散り

同 南陽

故郷へ思案にあまるベンを取り

連 樂

灰皿を一げいに暮れる音ばかり

登美坊

秒針の途方に暮れる音ばかり

笑 鬼

女房にすまぬ思案のまがり角

笑 壺

追ひせまる思案へ止まぬ胎動

同 新期

春雨へぬれてる驢馬の思案顔

同 新期

思案する二人火のない長火鉢

同 新期

老の身の思案にあまる子の行く

同 新期

氣を替へて座りなほして又思案

同 新期

(人)頼まれて嫌とも云へず考へる

同 新期

(地)好い思案つかず晦日灯が點り

同 新期

(天)膝枕緊縮の事フト思ひ

同 新期

(軸)縁談をどうしたのも義理と怒

同 新期

宿題 電 氣 柳

路 選

母一人娘一人夜の電氣鍋

新 期

停電に皆んなが和した草津節

同 新期

京詣り電氣仕掛へ足を留め

同 新期

新任の課長電氣がついて去に

同 新期

若旦那電氣のついた事を知り

同 新期

(五客)停電へ闇から闇の電話口

同 新期

(同)夕化粧ばらラザオのいゝ暮し

同 新期

(同)子をあげ乍ら電氣の下に来る

たかし

(同)暗轉に電氣が覗く舞臺裏

登美坊

(同)停電の中に意見まだ續き

新 期

(人)電燈のフト氣が基をかこみ

同 登美坊

(天)百燭と云ふ明るみへ里の母

星 明

(軸)郊外の闇を彩のボールの火

同 登美坊

(同)二人を眞赤に染めるネオン燈

同 登美坊

席題 癪 癪 互

選

癪癪が女房にすまぬ朝の膳

笑 鬼

癪癪をおさへ熱燗待つて居る

新 期

癪癪の母はいきなり乳房出し

同 新期

荒つぽく座つて膳をれめ廻し

同 新期

癪癪が手傳ふて居る皿の音

同 新期

治まつた時母となるヒステリ

同 新期

癪癪も持つが手相のいゝ男

同 新期

癪癪の締めた雨戸が指を喰ひ

同 新期

癪癪へ障らぬ様に母が居る

同 新期

投げつけた方が驚く煙草盆

同 新期

癪癪もなく小使は老けて行き

同 新期

カッとした癪へ五人の子を思ひ

同 新期

川柳 神戶支部同人句會(神戸)

同 新期

維誌社 二月廿六日夕華水居

同 新期

互 野 華 水 報

同 新期

巖籠にけつまついてる色男

同 新期

病室へ届いた籠の柿の色

同 新期

断 言 春 秋 選

同 新期

その腕があれば断言すると云ひ

同 新期

キツパリと云ふた頭が白過ぎる

同 新期

(人)断言をしてゐた議員ごに

竹 風

(地)断言をしたが味方にて呉れず

同 竹風

(天)断言へ念をおしてゐる眞の友

同 竹風

手 品 華 水 選

同 竹風

おとなしい友をだました手品なり

同 竹風

(佳)云ふことがない手品暇を入れ

同 竹風

(同)宴會の下手な手品がよろこば

同 竹風

(軸)種を聞く男大きな口を開き

同 竹風

本 心 明 殊 選

同 竹風

本心を聞くのがこわいコンバクト

同 竹風

本心を聞きに来てのむ冷たい茶

同 竹風

(軸)本心に還へる日を待ついちじ

同 竹風

兼 匠 羽 織 二 南 選

同 竹風

出無精へ羽織の紐が無事居る

同 竹風

紋付の羽織をぬげば只の父

同 竹風

(佳)歸らない襷り錦紗の羽織着る

同 竹風

(同)色街の羽織はそれなりに居る

同 竹風

(軸)まつた嘘へ羽織を着て呉れ

同 竹風

至誠川柳三月の例會

同 竹風

夜 櫻 阿 形 一 杉 報

同 竹風

おでん屋の荷で夜櫻を賞めてゐる

同 竹風

夜櫻に来て水ばかり飲んでゐる

同 竹風

ベンチから見る夜櫻の淋しすぎ

同 竹風

夜櫻にほくらみみれの風邪を引き

同 竹風

妻の氣も汲んで夜櫻やめにする

同 竹風

肩上げのまゝで夜櫻氣がとがめ

同 竹風

夜櫻の埃に女氣を焦ち

同 竹風

(人)夜櫻に母は押さぬとしに立ち

同 竹風

(地)夜櫻のくらひところから風が

同 竹風

(天)夜櫻は燐火だけの色になり

同 竹風

(軸) 振り返りやまだ夜櫻の埃なり

鑑 引

路

耶 選

二月十一日

岩崎柳路報

踏切で切れた女にフト出逢ひ
踏切のガードに變る新開地
踏切で内證話が又續き
踏切で丸刈寒いナと思ひ
踏切を越へて進軍ラッパの音
踏切で待つ一本の巻煙草
踏切の自動車中を覗かれる
踏切の土手に咲いてる月見草
柳路

空鑑に五本の指を見つめたり

空鑑はおれの運に叶ふたり

鑑引に負けて横矢を言ふて見る

鑑引は子に引かせよと女將さん

くじ引のかへり等をかたげてる

腕まくり鑑引までの好い元氣

くじ引の南無八幡を祈つてゐ

此の鑑に女一匹かゝつてゐ

(人) 鑑引に強い氣の子にされて

(地) お氣の毒と鑑引たわしなり

(天) 請合ふて來た鑑引の堅ふなり

紙

互

貴 山 選

衝立をへだてすぎ焼女連れ

登美坊 選

前幹事楊井二南氏が今度都合に依り居所を大阪に轉せらるる爲めその慰勞送別の意味を部友に迎へた歡迎會とを兼ねて親しく夕食を共にした後作句に就りました。

折紙に優しい文となつてをり

溜つてくれば紙屑籠は踏んで置く

書を寝てゐれば機い障子紙

降参のやうに鼻紙あてがはれる

早速の御用に郵紙破られる

兒をもつて久々に折る紙の舟

小半紙へ書道めいたものも書き

紙をやればハツに折つた手習子

痛 癢

互

同 路 選

春の宵女給ナフキン折つて

登美坊 選

自惚れあるのへ調子合はしとき
自惚へ午後の疲れた蠅が来る
自惚れる男の財布あてにする
自惚れが柳の影でまたさける
自惚れが眞直ぐ通る賑かさ
自惚れがうなづいてゐる展覽會

痛癢な聲で母は教へてる

痛高い聲に報ひし三疊打

杭辯の出来ぬ痛癢横を向き

痛癢のあたまを掻けばフケがとび

痛癢のしばらくすると米を磨ぎ

父に似てると額のすじを言ふも母

痛癢の氣味悪いほど笑いつてゐ

竹 同 選

踏切の向ふと話す間の電車

登美坊 選

先輩はマツチだまつてもつて行き
先輩に聞けば不平がまじるなり
先輩へ新聞先に届けられ
先輩の煙草のけむり静かなり
先輩の煙草のけむり静かなり
先輩の煙草のけむり静かなり

柳路居小集 (満洲)

二月十一日

岩崎柳路報

踏切で切れた女にフト出逢ひ
踏切のガードに變る新開地
踏切で内證話が又續き
踏切で丸刈寒いナと思ひ
踏切を越へて進軍ラッパの音
踏切で待つ一本の巻煙草
踏切の自動車中を覗かれる
踏切の土手に咲いてる月見草
柳路

湯上りの肌を氣にして病上り

湯上りの遠く聞へる五本松

湯上りの酒欄干の雪景色

湯上りのこと更長く見ゆる首

湯上りで聞く驚のいつたまふ

衡器へ手拭一つ持つたまふ

土産屋の前温泉の町の貸し浴衣

(軸) 湯上りの儘禮に來る貰ひ風呂

すぎ焼

新 朗

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

俺とこも困つてゐると元馴染
宿帳へ馴染の筆が太過さる
(佳)孟へ昔馴染がうら淋し
(同)夏蜜柑幼な馴染の中にむく
(軸)馴染なら馴染のやうに電話口
兼題得 意 明 珠
二 南 秋 春 珠 明 二 春 秋

通信簿父は得意になりきれず
得意先主人に云へぬ無理を云ひ
萬才師得意な顔で笑らはせる
増がれてゐるとは知らぬ得意なり
(佳)床とは得意の色も見せてあす
同 竹 風 弘 秋 春 二 南

翠夢居偶會 (大阪)

照夕 陽 翠 櫻井圓角報
あの夕陽沈めば俺の體なり
戀の行手に夕陽沈みぬ 靈 夢
一日の疲れへ夕陽息づける 翠 夢
照興 奮 靈 夢 翠 夢

興奮へお國言葉で吃つてゐる
茶人帽恥かしいほど興奮し
興奮に別な女給の親切さ
みつる 圓 角 夢 翠 夢

塗青柳壇句會 (大阪)

一月廿五日 於塗青會館熊谷紅報
初天神、無料 互 選
初天神いつも馴染の店が出る 多 助
丸留で詣る今年の初天神 波 計
餅花へ簞のといく初天神 光 路
易斷へ無料うなづく計りなり 同 波 計
サーピスはコーヒ無料の札を呉れ 光 路 選

風上げ

光路選

奴風三丁程も引づられ
奴風骨ばかりが樹にかゝり
(軸)風一つ動かす空に暮れかゝり
寫 眞 波 計
光 路 助 坊

自惚もあつて増焼きたのむなり
寫眞屋がチト困つてゐる鼻の位置
(軸)その頃はまだ肩上げも寫眞
笑 ひ 光 路 選
紅 波 計

易斷を笑つて居れど氣にもなり
春と言ふ只それだけに微笑まれ
獨り者笑はず今日も森をぬけ
(人)世間並聲丈け派手に笑つて居
(地)父と知り箇のな口が笑ひ呉れ
(天)笑ひたさ社長の前で迷つて居
(軸)迷懷の道樂もした高笑ひ
光 路 選

春秋居偶會 (神戸)

その一(二月十九日) 西村明珠報
裾、闘士、首巻
見せに來た様に聲になつて裾模様
拍手から闘士の聲になつて行き
夜の火事妻に首巻わたされ
その二(二月二十二日)
風、母、菓子、紙

なぐさめにならぬ障子に風の音
千代紙の屑を母掃き捨てる
母性愛雜誌は箇條書に
女の子今度の母へ嘘をいひ
來客へこの菓子鉢は支那土産
お茶菓子催促をする顔へ出し
氣短かな父が紙屑ばかりする
同 明珠報
光 路 助 坊

法律へ紙一枚がものを云ひ 春秋

第二回關西土地句會(大阪)

二月十四日

廣瀬無鬼報

金庫 琴人選

金庫を後に質屋の目は光り
金塊を呑んで金庫の無表情
大金庫課長の指揮で開かれる
争をよそに金庫は知らぬ顔
表 札 山雨樓選

祝品持つて表札さがして居
表札がなくても掛取やつて來る
春雨の中に表札見當らず
表札は名刺にしとく二階借
表札を覗いて居れば歸つて來
表札に肩書ありつたけを書き
同 鬼 月 久 選

雨の音はつきり聞いて留守居する
日傭の欠伸は長く雨に消え
船頭の飯の煙へ雨が降り
大降りの中へひよつこり國から來
みそれも雨に變つた樋の音
雨の宵老婆ちよこんと店に居る
弱 點 山雨樓選

弱點を問れて娘下を向き
弱點は互にあると仲裁し
手を出したのが弱點となつてまい
弱點は笑はぬ彼にしてしまひ
弱點を突けば臍くり出して出る
弱點もあつて意見がピンと來る
白粉で隠せぬ弱點もつてゐる
同 素 月 久 選

弱點を問れて娘下を向き
弱點は互にあると仲裁し
手を出したのが弱點となつてまい
弱點は笑はぬ彼にしてしまひ
弱點を突けば臍くり出して出る
弱點もあつて意見がピンと來る
白粉で隠せぬ弱點もつてゐる
同 素 月 久 選

弱點を問れて娘下を向き
弱點は互にあると仲裁し
手を出したのが弱點となつてまい
弱點は笑はぬ彼にしてしまひ
弱點を突けば臍くり出して出る
弱點もあつて意見がピンと來る
白粉で隠せぬ弱點もつてゐる
同 素 月 久 選

弱點を問れて娘下を向き
弱點は互にあると仲裁し
手を出したのが弱點となつてまい
弱點は笑はぬ彼にしてしまひ
弱點を突けば臍くり出して出る
弱點もあつて意見がピンと來る
白粉で隠せぬ弱點もつてゐる
同 素 月 久 選

(地)日本晴くるり〜と宙返り
(天)晴れや笑あきらめ切つた顔
(軸)冤罪の晴れてからだの置き所
迷 惑
迷 惑を隣へ詫びる火の始末
迷 惑へ仲裁人は御尤も
迷 惑と知りつゝ酒の尻を握へ
迷 惑と咳拂ひして二時を聞け
寝つかせる計りへ隣ジャズをかけ
迷 惑と知つて拒めぬ判を押し
迷 惑を振り切る程の智慧もなし
迷 惑の手が親切らしく伸び
迷 惑な事同姓の人異ひ
酔ふたのが隣へ座る迷 惑さ
迷 惑を顔にもみせぬ上手もの
迷 惑を掛けない事で覺がつき
迷 惑の真味被告になつて知り
迷 惑をかけた意識する翌日
(秀)人の氣も知らず外交尻をすへ
(同)重役の迷惑と云ふ顔で聞き
(同)小包で済むにんと言傳かり
(同)迷惑の留守へ頻りにベルが鳴り
(同)迷惑も知らず鉄力屋更けても
(同)迷惑をイツ喜ぶ里の母
(人)迷惑と思ふ瞳を見逃かさず
(地)迷惑な事には居候が死に
(天)晴衣着て待つ子へ久し振る來
(軸)修養の二字へ迷惑たゝみ込み

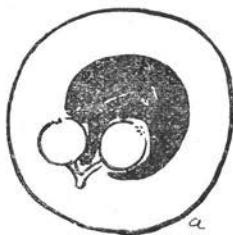
素 泉 五 健 素 人 松 葉 楓 影 兩 夢 拓 水 芝 帆 青 帆 芳 之 助 雨 桂 計 加 大 樓 喜 峰 喜 雨 花 之 助 素 泉 喜 峰 紫 石 素 人 五 健 樹 選 大 樓 伊 豫 守

芽柳にふれて川舟岸を出る
ニトリがまた叱られる庭木の芽
又た芽の出る時があらふとは挨拶
渡し場の柳芽ぐみて忙かしき
何の芽かツイ水をややる氣が起り
何の芽が又た植へて置く鉄の先
芽が出たからと伸びた髯を撫で
(秀)芽が出てくる忙しき
(軸)發芽の芽生へ立つて病み呆る
母
此の俺を生んだ母とは思へず
母親の辭真似て行き伸て行
母連れてハラ〜とする交又點
母となる日も近づいて針仕事
抱き上る母の輕さへ年を繰り
母親の意見が姉を片付ける
書留へ母なれこそなればこそ
縫うて母を夢を追ふ子をやツト見る
病む母へ智慧を借つて臺所
母となる意識産着も縫つて置
圓滿に母の主張も酌んで聞き
後添へ長女は母と言ひ泣き
女事務服を着替へて母になり
泳ぐ子に母の瞳は付きまといひ
三等に母の疲れのあからさま
母の眼に試験制度が無理に見
忍従の中に満足見出す母
三人の母とは見えぬクラス會
(軸)若き日の期待はよそに母と
急 所
質問戦急所外れた在野黨
日頃から覘れた急所間違はす
其急所擲んでユスル豆絞る

計 加 五 健 時 雨 樓 素 人 柳 女 時 雨 樓 五 健 夢 樹 水 樹 伊 豫 守 大 樓 二 大 樓 柳 女 素 泉 夢 紫 帆 青 帆 松 水 拓 耕 一 耕 一 樓 水 花 之 助 松 葉 拓 水

鼻吹で急所〜へ釘を打ち
冗談が急所をさした氣の毒さ
大蛇の急所漁師に譯もなし
刑事室急所突かれて注意入り
臨檢は急所〜に恐ろしきなり
痛いと其の一目が邪魔になり
あんな又うまい所を押さへて居
其急所裁判長の語尾強し
(秀)相被告急所さされて沈黙し
(同)名炎の急所へ効いた顔の黙
(同)答辯は急所を避ける聲になり
(同)差し向ひ急所をて座り替へ
(人)又急所つかれて亭主ムキに
(地)二次會で課長の急所スツパ抜き
(天)ニヤ〜急所記者の間で居
(軸)ぼんやりと見て急所は擲んで居
呼 鈴
御用の御方は呼鈴へ人の出
呼鈴に庖丁の狂ふ臺所
呼鈴へ出てく廊下の長い事
呼鈴へ給仕講義録を伏せ
呼鈴へ給仕磁石の様にけし
お得意の俵夫心得たベルを
呼鈴は嘆願らしい門構へけし
呼鈴を押し嚴かな兵衛へ
呼鈴へ何んだ洗濯屋の小僧
呼鈴へ何んだ洗濯屋の小僧
惡太郎呼鈴押してツイと逃げ
新つともは違ふ重役室のベル
いつもの事で社長ベルを押し
呼鈴へ社長の癖のあからさま
(秀)呼鈴で出ぬに名札を讀み返
(軸)動かぬベルもどいて手を叩き

青 帆 時 雨 樓 五 健 松 葉 雙 葉 拓 水 時 雨 樓 五 健 夢 樹 水 樹 伊 豫 守 大 樓 二 大 樓 柳 女 素 泉 夢 紫 帆 青 帆 松 水 拓 耕 一 耕 一 樓 水 花 之 助 松 葉 拓 水



杭 全 町 MEMO 雨 緑

▼主幹路郎先生が病氣で入院されてゐられます。一日も早く全快を祈ります。

▼蛭子省二氏が寄稿された「竹馬執筆」は記事幅輻のため次號へ掲載致す事になりました。

▼米村あん馬、畫家田村孝之介兩氏が、本社の推薦により、客員たることを快諾されました。今後一層の御後援を祈ります。

▼松盛琴人君から川柳雜誌の宣傳入の美麗なメモ數百冊寄贈されましたので、地方支部へそれ〴〵配付致しました。その他の句箋數萬、原稿紙數千枚の寄贈を有難く感謝致します。

▼四月例会から下足番を履つて、會場の下足整理をすることに致しました。

▼安井ひろし君が、欣女さんの遺稿を輯め四六版三十二頁の追悼號「はるかかの希望」を発行されました。悲しき思ひ出が涙ぐましくなります。

▼太田朝陽君は、三月十日より三月末迄の豫定で四國から九州へ旅行されてゐられます。

▼關本雅幽君が支部の人々のため研究誌「川柳行脚」を出して熱心に研究されてゐます。

▼前號で發表致しました、客員前田五健君から今後一層本誌のため努力を誓ひますと云

ふて來られました。松山柳壇と共に意を強うする處です。

▼福田山雨樓君が、三月十七日から公用で伊勢の松阪から奈良方面に旅行されてゐられました。同二十一日は謠曲大會に出席で多忙の由。

▼岩本素人君、松山を引上げて大阪で住むことになりました。

▼岩崎柳路君から、度々寄せ書を送つて來られます。奉大の川柳界で大いに氣を吐いて活躍されてゐます。

▼奉天の立井登美坊君が、今回新に本社の社友となられました。今後活躍を祈ります。

▼朝田新水君は、二月二十日二見から鳥羽へ旅行されて、管島へ渡つて、肉味美なる海女と焚火を中にして談ひ合ふこと一時間餘、川柳から見た海女を味つて來られたそうです。

▼中澤濁水君は、高知柳壇を設けられてから久しくなり、こんど土佐を川柳化するため「帆船」を發行されました。今後の發展を望みます。

▼楊井二南君は、大阪で住むことになったので、神戸支部幹事は日野華水君と交替されることになりました。新幹事の活躍を望みます。

▼熊本黄蛾君は、昨今不景氣になやまされてゐても社友はなかくやめめ。然し家事の都合で幹事は藤岡櫻果君と交替されることになりました。新幹事の活躍を望みます。

▼碓一流君から、益々池支部の愚態、安緒美、康夫、北洋等諸氏の應援で本誌の主張する處を徹底的に運動するとのこと、大いに望みますが健康を害さない程度にお願致します。

▼上村村樂君は、家事都合で社友を退かれることになりました。

▼楊井二南君は、大阪市區北濱五ノ三五組育ナシヨナルシチー銀行へ、移轉されましたが

ら通信は當住所へお願ひ致します。

▼竹田芦蘺君から、二月廿五日伊勢大廟から繪葉書を寄せられ、香り高い白木の新社殿や南地の藝妓の繰込の賑ひの便りも、おりました。が、社城の清淨さの句が一句も書いてなかつたのが遺憾にたえません。

▼島田翠峰君は、三月一日長女榮子さんを擧げられました。お喜び申し上げます。

▼毎月本社の例會に出席されてゐました不路子さんは、近く結婚されるので、郷里中河内郡住道へ歸られました。句に「嫁に行く話」はつきりかされる「不路子」とあります。

▼本田柳一路君長男金太郎さんが、三月六日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼番倉川柳社の主催で、東京川柳家訪問のため四月二日夜八時四十二分列車で、大阪を出發、着京直ちに市内見物一時より歡迎川柳大會及び歡迎宴を催される由、番倉川柳社の人々が多數出席されるそうです。

▼媛柳川柳社では、久良岐翁の謝恩號發行の由、翁の功績を挙げられることは柳界にとつてよい計畫です。

▼二十號まで續けられた、ひぐま川柳社では「ひぐま」の終刊號を出されました。

▼事務所からの苦言一つ二つ

▽近作柳樟の投句家で、一部とも二部とも署名なきものは、全部二部へ廻します。

▽近作柳樟の一部の投句家で、規程以外の用紙に一部と署名があつても二部へ廻します。から必ず葉書型を御使用願ひます。

▼四月號の發送後、私は法事のため一週間程郷里(金澤)へ参ります。

▼本號の編輯は、琴人、愚陀、町二の諸君と私とで致しました。

本社基金 釀金者御芳名

釀金を拜受致しました方々の御芳名を録し御厚志の程を深謝致します。(附順)

金參圓也

正木 準章殿

金壹圓貳拾錢也

金井有爲郎殿

金參圓六拾錢也

三好 計加殿

金參圓也

岩川奇可愛殿

金參圓也

藤本 主税殿

金五圓也

本社御旅文部

(内譯) 路郎、素人、路鳥、多郎

みつる、飛佐志、圓角、翠夢、斐

美、靈靈

小計 金拾八圓八拾錢

累計 金七拾壹圓八拾錢也

社告

本社基金募集

「川柳雜誌」が柳壇の力強い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、孤々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大旗を掲げつゝ力一ぱいに奮闘して來ましたことは諸君の風に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に賛同され、直接間接多大なる御聲援と御助勢を頂きました皆様御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つらく過去現在の實績を顧み、更に將來を深思します時に、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大な熱に燃えつゝあることは云ひまでも物質上に惠まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的效果を擧げることは容易ならぬことと存じます。さうしても川柳に熱を持たれ「川柳雜誌」を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことと致しました。何卒本社の微意のあるところを諒せられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

規 川柳雜誌社

○一口一圓以上とし幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

○御送金は大阪市住吉區杭全町六〇三、川柳雜誌社事務所内、基金募集係宛になるべく振替(大阪七五〇五〇)か爲替でお願ひ致します。

○バ切期日は別、定めませぬがなるべく本年中に一先づ打ち切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に録し領收の證と致します。基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。

投稿規定

▼近作柳樽及課
題吟の句稿は
葉書又は同型
の厚紙に各題
別紙に認め、
住所氏名雅號
を明記する事

▼近作柳樽は一
部又は二部の
いづれかを明
記する事

▼各地會報は半
紙判の原稿紙
に清記する事

▼文章は二十字
詰半紙判原稿
紙に認める事

▼書體はなるべ
く楷書「川柳
雜誌原稿」と
封筒に朱記す
る事

▼締切は嚴守さ
れたし。

▼投稿其他につ
き御問合せは
すべて通信料封
入の事。

募 集

第八卷第六號課題

四月五日締切
(各題十句以内)

▼笛子
竹内多聞選
松盛琴人選
伊藤綠之助共選
友淵貴山共選

▼森

第八卷第七號課題

五月五日締切
(各題十句以内)

▼蠅
麻生茂乃選
高橋かほる選
中見光路共選
木村晃卓共選

▼糸屑
職人

每號募集

▼近作柳樽(一部)十句以内
麻生路郎選

▼近作柳樽(二部)十五句以内
安井ひろし選

▼近作柳樽の一部と二部(同一人)で
投句することはお断りします。

▼光耀抄
麻生茂乃選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、應讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
牛箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)壹圓六拾錢
(牛ヶ年分は以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します)

廣 告 料

本誌への廣告に就き
ましては本社へ直接
御一報下さいませ
ば御相談に應じます

▼御送金は郵便日座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます▼御不在中でも俱ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記にて御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和六年 三月廿五日印刷
昭和六年 四月 一日發行

第八卷第四號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
發行所 大阪府西成區千本通五丁目七番地
川柳雜誌社
大阪府西成區千本通五丁目七番地
電話大阪三五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣 店

(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
(東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤、寶文館(函館)
石塚(京都) 三宅 (松山) 弘文舍 (石川縣) マコト十

川柳雜誌關係人々

(原はろい)

賛助員

川上三太

池澤弘樂

米村あ

岡本直一

吉村孝之

片岡純方

田村清平

嘉納辰二

窪田銀波

長崎柳秀

河井美樓

國枝史郎

立井左馬

藤村作郎

永井九馬

赤井清一

中川めく

末弘太郎

中野元子

客員

森元東

伊藤彦造

中野柳元

大島明造

中野陽子

岡田三子

中野水人

池田生田

桑原錦路

雪翠之助

京錦路

田邊支部

原野松

道頓堀支部

京錦路

天満支部

京錦路

濱寺支部

京錦路

神戸支部

京錦路

山口支部

京錦路

國館支部

京錦路

高知支部

京錦路

梅田支部

京錦路

盤ヶ池支部

京錦路

金澤支部

京錦路

金澤支部

京錦路

金澤支部

京錦路

金澤支部

京錦路

金澤支部

京錦路

金澤支部

京錦路

金澤支部

京錦路

石川双葉

西村明

西村明

川村明

河井明

立井明

永井明

中川明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

中野明

松田多

山本多

山本多

川村多

河井多

立井多

永井多

中川多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

中野多

三好計

白井里

平井里

日野里

須野里

杉谷里

同

岩本里

岩本里

伊藤里

長谷里

太田里

龜井里

高橋里

竹島里

藤里

酒井里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

中野里

朝田新

谷本新

水本新

庄本新

萬本新

橋本新

同

安井新

松本新

伊藤新

長谷新

太田新

龜井新

高橋新

竹島新

藤新

酒井新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

中野新

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速参上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

川柳 廣告 欄

川柳 むさしの

三月號(既刊)には皆様の川柳雜誌社の路郎先生を筆頭とし諸家の佳作を御手本に作句法が詳説してあります。二月號の「大阪柳壇の人々」は柳人必讀の文字大好評。川柳雜誌々上にも御紹介を頂きました。

本誌を見ずして柳界を語る勿れ

二錢郵券六枚送れば指定號送る。東京淀橋町角筈六五八近藤館ニ坊宛

販賣店 大阪道頓堀 明文堂書店
大阪東區五町 宮脇書店

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出来ました。左の價格でお領ち致します。此川箋を御使用下さい。百枚一冊 價金 貳錢 (送料共)

◇御申込は本社事務所宛 (一錢切手代用可)

創刊號あり

「川柳雜誌」創刊號一部あり
金壹圓
本社事務所宛

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附(金文字入)で書架を飾るにふさはしい簡素な装幀に出来ました。第一卷 第二卷 各金五圓也
第三卷 第四卷 各金五圓也
第五卷 第六卷 各金參圓也
當分第五卷に限り
特價 金壹圓五拾錢

尙古い川柳雜誌御入用の方に、は特に左の値段でお領ち致します。いづれも下記御申込込下さい。

第二號より第四十七號まで 各一部 金拾錢
第四十八號より第七十一號迄 各一部 金貳拾錢
(但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません)

川柳雜誌社事務所

藤本卯之助 編輯

新聞印刷便覽

附新聞紙法及記事關係法規
諸屆様式 金五拾錢
發行所 藤本兄弟印刷所
大阪市東區農人橋二丁目
振替大阪八二八四番

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提けて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君こ僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



主 持 ・ 國 主 國 主

大正十三年三月廿五日第三種郵便物可認（毎月一回一日發行）
昭和六年三月廿五日停刊本 昭和六年四月一日發行

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦
ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

伊豆椿香油本舗

川柳雜誌

（第八十七號）

定價金三拾錢